
嫌われし鳥の生涯

kotorinakisekai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嫌われし鳥の生涯

【Nコード】

N4478V

【作者名】

k o t o r i n a k i s e k a i

【あらすじ】

嫌われ者の鳥が一羽いた。その鳥は他の鳥達から醜悪な鳥だとして迫害を受けていた。しかし、この鳥が嫌われる真の理由は『仲間を持たない』からだっ

追い詰められた鳥は、自ら死ぬ事を考え始める。鳥の生涯は、そこで終わっていたかもしれない。しかし、鳥はそこで死ぬことはなかった。一度死にそびれた鳥は、生涯『死』という概念に囚われるこ

とになってしまふ。

孤独や悲劇、怒りや悲しみの中で苦しみもがく赤き鳥……。そんな鳥の長い長い生涯を、ここに綴る。

第一話『孤独』（前書き）

今後話が進むと、残酷な表現をする可能性があるのでタグを付けていますが、今回はありません。

第一話『孤独』

ある場所に、一羽の雄鳥が居た。

その鳥はどこか疲れ果てた表情をしながら、湖の水を飲んでいる。すると近くの茂みで、ガサガサと草が揺れる音が聞こえてきた。

その鳥は、天敵が来たのだろうかと、一瞬緊張してその方向を見る。その音の正体は天敵ではなく、その鳥とは別の種類の鳥達だった。しかし鳥にとって、歓迎すべき客ではないことには違いなかった。

「見ろ、あの鳥が湖で水を飲んでいるぞ。なんと気味が悪いことだろう」

「まったくだ。あの真つ赤な羽は、無差別に動物を殺して付いた血の色に違いない。その証拠に、ここまで血の臭いが漂ってくる」

「その上、無駄に体が大きいから恐ろしい！ 翼を広げればまるで鷲の様に巨大で、鋭い嘴と、鋭い爪をギラつかせながら飛ぶ姿は、まるで悪魔の使いのようではないか」

「こそこそと……しかしはつきりとした口調で、鳥達はその鳥のことを罵倒する。鳥達の表情から、心の底から嫌悪しているというよりは、その鳥をイジメて楽しんでいる雰囲気を感じられた。

罵倒された鳥は、特に何も言い返すこともせず、その場から飛び立った。

その鳥は、決して不気味ではない。むしろ、全身の赤色の羽は、太陽の光を反射して鮮やかに輝いている。四本の独特の形をした尾羽は、風にたなびいて美しいし、頭から生えた長い冠羽も、鳥が羽ばたきたびに揺れて目を引く。

翼を広げれば、全長は一メートルほどになる。見る者によっては、言葉を失うほど美しくその姿は映るだろう。

そのような称賛されるべき姿を持っておりながら、他の鳥達から

の罵声と嫌がらせに対して、その鳥は疲れ果てていた。

鳥の体は大きく、嘴や爪も、強力な武器となるだろう。一羽一羽では、この鳥にかなうものはそうは居ないはずだ。本来ならば、他の鳥達はその姿に恐れおののき、平伏することはあっても、迫害するはずなどない。

ではなぜこの鳥は、このような扱いを受けているのだろうか？
それはその鳥は仲間がいないからだ。

鳥が物心のついた時、身体大きさに不釣り合いな小さな巣の中に居た。

親鳥の顔は覚えていない。ただせつせと餌を運んでくるだけの、簡素な愛情しか受けられなかった。少なくとも、自分とはまったく違う姿をしていたような気がする。身体大きさが全く違っただし、羽の色ももつと地味だったと思う。

ある日、自分で餌を取るために巣から飛び立ち、獲物を一匹捕まえて意気揚々と巣に帰ったら、親鳥の姿はすでになかった。親鳥とはそれっきりだ。

鳥は感謝すべきなのだろうか？ 生きていくだけの力がつくまで育ててもらえたことに……。

鳥は恨むべきなのだろうか？ いっそ殺してもらえなかったことに……。

鳥が巣立つてから最初にしたことは、仲間探した。親鳥とすら、薄い関係しか持たなかったその鳥は、愛に飢えていた。自分と同じ仲間を求めて、あたりを飛び回った。

しかし見つからない。何処を探しても、自分と瓜二つの鳥はおるか、赤い翼を持った鳥や、自分と同じくらい大きな鳥を探すのにすら苦労した。

一部分が似たような鳥を見つけても、『お前とは違うッ！ お前とは一緒にするなッ！』と仲間外れにされ、軽蔑のまなざしを向け

られた。

結局、鳥の仲間は見つからなかった。鳥が罵倒されるのは、不気味だからとか、恐ろしいからとかではない。ただ、仲間を持たないから嫌われるのだ。

仲間さえいれば、他の鳥の罵倒に黙ってはいない。いくらでも言い返すし、必要があれば報復もする。しかし、仲間を持たない今の鳥がそれをしたところで、数の力によって、無様に傷つくだけだ。だから、鳥は必死に耐えている。

一年ほどそうして耐えて過ごした。しかし、鳥は決意した。もう一度仲間を探そうと。

今まで鳥は、自分の生まれ故郷の近くばかりを探していた。それは当然だろう。自分が生まれたのはこの場所なのだから、この近くに仲間が居ると考えるのが自然だ。だが、このあたりに仲間はいなかった。なら、仲間達は大きく移動するのもかもしれない。

鳥の住んでいる地は、半径三百kmほどの巨大な円島だ。東西南北それぞれに人間の王国が一つずつある。この四国をくまなく探せば、仲間が見つかるかもしれない。

鳥が今居るのは、北の国だ。東、南、西と探していけば、きっと見つかる。

「大丈夫さ。もし仲間が見つからなかったとしても、私を受け入れてくれる土地はきっとある。私が今まで不幸だったのは、ひとえにこの土地が陰湿な場所だっただけなのだ。他の国に行けば、きっとそんなことはあるまい」

鳥は自分にそう言い聞かせて、他の国に向かって旅立った。

しかし、結局扱いは変わらなかった。

鳥が飛ぶ姿はひどく目立ち、鋭い嘴や爪は、凶悪な刃物を連想させた。見たこともない様な深い赤色の羽根は、やはり見る者に恐怖を駆り立てた。

「子供を隠せ！ 悪魔が子供を狩りに来たッ！」

「追い返せ！ 追い返せ！」

「なんと醜悪な鳥だろう。見た瞬間に目を背けたくなる姿というのは、なかなかない」

結局今までと同じ……いや、今まで以上の迫害を受けることとなつてしまった。

たどり着くだけでも苦勞しなければならぬ様な秘境にも行つてみた。こんな厳しい場所に住む鳥はそんなに居ない。だから当然住む鳥は個体数が少ない。故に、孤独という点では嫌われた鳥と同じはずだ。しかし……。

「なんだお前は、恥も知らずに訪ねてきて、一緒に暮らしたいだど？ ここはお前のような、汚れた存在が居ていい場所ではない！ 早々に立ち去れッ！」

誰も住んでいないような場所に居るということは、排他的な意識が強くなる。特別な場所に住んでいる自分達を特別視し、余所者は誰であろうと拒絶するのだ。

鳥は四国すべてを回り終わつた。しかし、やっぱり自分の仲間達は一羽も見つけることは出来なかつた。

完全に打ちのめされ、生きる希望を失いかけた鳥は、天空に向かって叫んだ。

「ああ、神よ！ この世に私より孤独な者はいませんッ！ どんな生き物であっても、必ず仲間が居ます！ ただ一匹で生きていける生物ですら、世界のどこかには必ず同じ仲間が居るのです！ ですが、私はどうですか？ この島をくまなく探しましたが、私の仲間はおるか、私を受け入れてくれる地すら見つかりませんでしたッ！ 私はこれからどうすればいいのでしょうか！？」

それは孤独な鳥の嘆き。自分ばかりが苦しんでいる不正に対する神への不満。

その時鳥は、神の声が聞こえた気がした。

『ならば死ね』

実に明快な回答だった。声は続ける。

『生きることがただただ苦痛で、お前が今後何も得られることが無いというなら、それはもはや生きているとは言えない。心臓が動くたび、息をするたびに生きる時間が増え、それは拷問となってお前を襲う。逃れたいと思うなら今すぐ死ね。それでお前の苦痛は終わる』

鳥は視線を空から地面に落した。

乾ききった地面が見える。真つすぐ落ちれば間違いなく死ねるだろう。

「……………」

鳥は羽ばたくのをやめた。当然鳥の体は降下する。まっすぐと……徐々に加速しながら……

「……………ひッ！」

鳥は落ちる途中で羽ばたいた。加速する体、迫る地面、その恐怖に耐えきれず、鳥は羽ばたいてゆっくりと地面に降り立った。

「臆病者めッ！」

鳥の口から、自然とその叫びが漏れた。

「私は臆病者だ！ 死ぬのが怖い！ 死後の世界が怖いわけではない。死が怖いのだ！ どのような方法であつたとしても、私はそれを恐れて尻込みをするだろう！ それ以外に救われる方法が無いと知りながら、それを拒絶する。いくら差別され、穢され、名誉を失つても、浅ましくただただ生きること執着する！ 死が恐ろしいばかりに！ なんと憐れなのだ……なんと、なんと醜いのだッ！」

鳥は蹲つて泣く。周りをはばからずに、大声をあげながら泣く。

幸い、その泣き声を聞く者は誰もいなかった。

しばらく泣いた後、潮の匂いと、ひんやりとした風が鳥を撫でた。鳥が顔をあげると、そこには大海が広がっていた。

第一話『孤独』（後書き）

ファンタジーのつもりで書いていきます。

更新は週に一回程度の頻度にするつもりです。

暗い話になると思いますが、これからよろしくお願いします。

第二話『海上』

鳥は海が良く見渡せる岬に来ていた。あたりには海鳥達すらおらず、静かだ。

鳥はしばらく、潮の香りの混ざった風を浴びながら、ただ黙って水平線の向こうを見つめていた。岬から見渡す限りは、海の向こうにはなにも無く、無限の青い水の地面が続いているように感じられた。

鳥は翼を広げ、一度全身に潮風を浴びてから、海に向かって叫んだ。

「海よ！ 私はこれからあなたの上を飛びます！ 海上の空を駆け、何処までも飛んで行き、大陸を目指すのです！」

海はその叫び声を、波の音で掻き消す。

「笑いますか？ 私のことを？ そうですね、あなたはきっと笑うと思います。たかだか数百キロ程度の島の中ですら、休み休みでなければ飛ぶことができない私です。何百、何千、あるいは何万km離れているか分からない大陸を目指して飛ぶのです。きっと私は力尽き、海の中に落ちてしまおうでしょう！」

鳥は恐らく渡り鳥ではない。島の中ですら、一息で飛びきることができないのだから、渡り鳥であるはずが無い。

しかしだからこそ、島の中で仲間を見つけれなかったということとは、世界にただ一羽の存在であるということを証明している。

「私はあなたの中に落ちてしまうでしょう。ですがこれは自殺ではありません！ 私はあなたの中に向かって飛ぶのではなく、大陸に向かって飛ぶのですから、これはけっして自殺ではないのですッ！ 私は……殺されるのです。大いなる存在であるあなたにッ！」

海はただそこにあるだけで鳥を殺す。絶望の淵にある鳥を……。私の絶望を終わらせるには、もはや『死』以外にはないでしょう

！ ならば、あなたが与えてください。誰よりも大きなその懷で、私のことを包み込んでください！ 私のその命のともしびと共にッ！」

鳥は最後まで言い切り、大きくはためいて飛び立った。

* * *

鳥が岬から飛び立つてから、四時間ほどが経とうとしていた。

飛行距離はせいぜい、一五〇km飛んだかどうかだろう。

鳥は海上二〇〇mという、低い場所を飛んでいた。普通鳥が海を渡る場合、山を越えるくらい高く飛ぶ。それをしないということは、最初から海を渡ることをあきらめているのだ。

「……………」

鳥はさらに低く飛び、海から十数mの高さまで降下する。海の中に飛び込むつもりはない。自ら飛び込まなくとも、やがて力尽きて嫌でも落ちる。今だけは、美しい海を間近で見たいと考えたのだ。

「……………」

飛び込む気などないというのに、自分が海の中に墜落する姿が容易に想像できて、鳥の体は震えた。海に引き寄せられているような錯覚にも襲われる。

さらに海を見つめていると、海の中に影が見え始めた。鳥が呆然としていると、その影はどんどん数が増えて行き、人間の手のような形に見えてきた。その手の影は、海の中で手招きをして、鳥のことを呼ぶ。早く飛び込めと、早く死ねと呼んでいる。

強い恐怖心に襲われながらも、鳥はその影を見ることをやめられない。やがてその影が、海の中から鳥に向かって手を伸ばし……………。

「うわぁああぁぁ！」

鳥は叫び、首を大きく振って幻影を掻き消し、数百メートルの高さまで一気に上昇する。

「怖い怖い怖い！ 私は死ぬのが怖い！」

鳥は「怖い、怖い」と言いながら涙を流す。涙を流しながら、己の不幸を呪った。

なぜ自分はこんなに苦しまなければならないのだ？ 自分はただ仲間が居ないだけの普通の鳥だというのに！ それを他の鳥達はどうして受け入れてくれない？ 受け入れてくれないまでも、どうしてそつとしておいてくれないのだ？ なぜ……自分はこんなところを飛んでいるのだ……？

鳥はフツと空を見上げる。自分は今日死ぬというのに、空はどんよりと曇り、落ち込んだ気分が、さらに沈み込んでしまった気がする。今日くらいは雲ひとつない、青々とした空を見せて欲しかったのに……。

いや、これでいいのだ。これから自殺するというのに、空が晴れ渡って、晴れ晴れとした気持ちを駆り立てられるようではまるで皮肉ではないか。どんよりとした空の方がこの場合はむしろふさわしい。

ああ、それより雨が降りだしたらどうしよう？ 雷が鳴り始め、嵐になったらいったいどうしたら？ そうしたら自分は誰に殺されるのかはつきりしない。自分を殺した相手くらいは覚えておきたいというのに……。

(……変わらないか。誰に殺されようと、それは私より立派な存在には違いなのだから……)

鳥は心の中でそう呟き、儚げに笑って目を閉じた。

「死にたく……ないな……」

すると、空から温かな光が自分を刺したような気がした。雲に切れ間でもできたのだろうかと言葉をあげると、鳥はその光景に啞然とした。

「怖い怖いと呟きながら、海の上を飛ぶのは一体誰ですか？」

鳥が見た光景は、強い光をまとった人間の女性が、ゆっくりと雲

の間から下りてくる姿だった。

「お前ですか？ 悲痛な声が空の上まで聞こえてきましたよ？」

「あ、あなたは誰です？」

「私ですか？ 私はこの世界を創った者の一人です」

世界を創った。ならばそれは神だ。そのいで立ちからも、他の生き物とは違う次元の存在であることが感じられた。この世界を創った……創世の女神。

「お前はそんなに怯えながら飛んで、一体どこへ行こうというのです？」

「た、大陸です。私の住んでいた島には、私の住む場所が見つかりませんでしたから……」

「大陸へ……？」

女神は鳥を見つめて、少し考えてから口を開いた。

「それはやめておいた方が良いでしょう？ お前の体はそんな長距離を飛ぶことができるようには見えませんし、こんな低いところを飛んでいたら絶対にたどり着けません」

女神に大陸までたどり着けないだろうことを予言された……。ならば間違いないとどり着くことなどできまい。途中で力尽きて落ちるのだろう。鳥は薄く笑った。

「それでいいのです。分かっていましたから……」

「お前……自殺するつもりですか？」

「自殺ではありません。……私は殺されるのです、海によって殺されるのです。私は大陸に向かって飛んでいるのですから、海に落ちて死ねば、それは海によって殺されたことになるでしょう？」

不思議と穏やかな気持ちだった。最後に女神と出会うことによって、心の整理が付いたのかもしれない。しかし、女神は厳しい表情をしながら鳥を見た。

「いいえ、お前のそれは自殺です」

鳥はハッとして女神を見返す。

「お前は、大陸にはたどり着けないことを知った上で飛び立ったのです。途中で力尽き、海に落ちて死ぬことを理解していたなら、お前は自殺するために飛びたったのと同じです。勝手に海を殺害者に仕立てることはおやめなさい」

鳥は俯いた。確かに女神の言うとおりだ。これは自殺以外の何物でもないだろう。だが……。

「私は……私には自殺する勇気などありません！ 尻込みしてしまうのです！ 死が恐ろしくて耐えられない……それだけの勇気があれば、とつくに海の中に飛び込んでいるはずです！」

「勇気という言葉を使うのはおやめなさい」

女神はびしやりと言った。

「勇気とは尊いもの……。善の行為を行う時、その障害に立ち向かう思いのことを言います。対して自殺は暗い行為。どうしようも無く行き詰まり、生きる希望を失った者がする最終手段です。己の信条や思想から、何かを訴えるために死ぬ者もいるでしょうが、死はそれだけで暗いものなのです」

今から死のうとしている鳥にとって、その言葉はつらいものだった。女神と顔を合わせないようにすつと俯く。

女神はそんな鳥に構わず続けた。

「お前は『殺される』と言いました。確かにお前は殺されるでしょう。お前自身によって」

「それは、どういうことですか……？」

「『自殺』は、自分を殺すと書きます。『自死』……自ら死ぬとは書きません。だからあなたは確かに殺されます。しかしお前を殺すのは海ではなく、お前自身。故に、お前がしようとしていることは、間違いなく自殺なのです」

女神にはつきりと言い切られ、鳥は沈黙する。

「私は自殺が間違っているとも、自殺が悪だとも言いません。しかし、『勇気』という言葉を使い、自殺を美化するのはおやめなさい。」

どれほどの思いによって自殺を決意したとしても、自殺は所詮自殺です。非常に暗く、悲しい最終手段。それに対して『勇氣』という言葉を使うのは間違いです」

黙って聞いていた鳥が、その女神の言葉に語気を荒げて叫んだ。それは反論と呼ぶにはあまりに感情的で、悲痛な悲鳴のようにも聞こえた。

「だったらなんだというのですか？ 神は私の問いかけに対し、『死ね』と答えました！ 苦しみしか残っていないのならば、むしろ死んでしまえと言ったのです！」

鳥は聞いた。天空に向かって、『どうすればよいのか？』と叫んだ時、『死ね』と答える神の声を……。

「神はお前の問いかけに答えてはいません。もし、そのような声が聞こえたとしたなら、お前自身が答えたのです。世界には絶望しか残っていない。生きることは拷問に過ぎない。ならば、死んで解放されてしまえ。お前の心の中がそういう思いで満ちていたから、神の代わりにお前の心の声が聞こえたのです」

「だが、他にどうしようもないッ！」

鳥は女神相手に構わず叫んだ。

「私は孤独なんだッ！ 世界にただの一羽も仲間が居ない。つましく暮らそうと思っても迫害される。ただ生きることすら私にとつては苦痛になるんだッ！ だったら、死んでも楽になりたいと思うのは当然じゃないかッ！」

女神は表情を変えずに、静かに鳥に問いかけた。

「では……お前が静かに暮らし、迫害を受けることのない土地があったとしたなら、お前は生きようと思いませんか？」

「当たり前だッ！」

女神は鳥の目を見据え、その言葉が嘘ではないことを理解する。「ならば生きなさい」

その瞬間、大きな雷が近くの雲から発生し、轟音を立てて海に落ちた。

強烈な閃光と轟音で、鳥は一瞬視力を失う。気がつくと、女神は居なくなっていた。

「……幻？ はは、絶望の極限状態にあるのだ、幻覚くらい見てもおかしくはないか……。ん？ あれは……」

そう遠くない所に、海にポツンと浮かぶ孤島が見えた。

第三話『遭遇』

鳥は発見した島の周りをゆっくりと旋回していた。あまりに都合よく現れたこの島を訝しんでいるからだ。

幻覚から覚めると同時に島を見つけるなど、偶然にしても気持ちが悪くはないか。

（幻覚……あれは幻覚だったのだろうか？）

幻覚にしてははっきりしていた。現れた女神からは、他の生き物からは感じられない神々しさが、確かにあった。

とりあえず鳥は、この島に降り立ってみることにした。これ以上飛び続ける体力はない。この島を無視して飛び続ければ、必ず海に落ちることになるだろう。

地面にぶつかって死ぬのを恐れた鳥が、死ぬのが分かっているこの島を無視できるはずが無い。死ぬ恐怖に襲われても逃げることでできないよう、退路を断つために海に飛び立ったが、こうして足場が見つかったのは決心も鈍る。

それに……。

『では……お前が静かに暮らし、迫害を受けることのない土地があったとしたなら、お前は生きようと思えますか？』

『当り前だッ！』

女神は鳥の目を見据え、その言葉が嘘ではないことを理解する。

『ならば生きなさい』

あの幻の中の女神の言葉……。あれが嘘でないのならば、この島は鳥が幸せに暮らすことのできる土地だということ……。

幻とはいえ女神の言葉なのだ。縁起が良い島には違いない。

「絶望の淵にある者ほど、なかなか死ぬことはできないらしい」

鳥は一言呟き、島にめがけて降りて行った。

*

*

*

鳥は島に降り立った後、恐る恐る島の中を探索し始めた。

しばらく調べていると、あることに気が付いた。

他の鳥が一羽も居ないのである。

耳を澄ましてみても、聞こえてくるのは虫や小動物の鳴き声ばかり、この鳥のことをあれだけ口汚く罵倒した他の鳥達の声は全く聞こえない。

あまりにも異常な現象。鳥は虫や他の動物達と違い、翼をもつ。他の動物達よりも、自由に陸地の移動ができるはずなのである。それなのに、今この場所に自分以外の鳥は居ないらしい。首を傾げながら、鳥はさらに島の中を調べ続けた。

すると、軽く見まわしただけでも、十分すぎるほどの食糧が見つかった。木や花に実った果実、食べ慣れた虫や小動物達、島の中心から湧き出る汚れない真水。これだけあれば、鳥が暮らしていくのには苦労しない。

しかも、島には鳥の外敵となりそうな動物達は見つからなかった。居るのは、木の実や虫を主食にしている小さな動物達ばかり。無防備に眠っていても、殺されることはまずない。

「はは……あははははッ！」

あらかた島の中を見て回った後、鳥は歓喜した。

「私はついに理想の地を手に入れた！女神様、私はあなたに感謝します！海上で見たあなたの姿は、幻などではなかったのですね？あなたは孤独な私を救うためにこの島を用意してくれました！

この島でなら、私は幸せに暮らせるでしょう！これから毎日あなたのために祈ります。島の中央にそびえるあの崖に祠ほこりを作り……」

その時鳥は、近くの茂みが揺れる音を聞いた。

その茂みを見ると、一部分だけが大きく揺れていた。今日は風など吹いていない、明らかに何かの動物が揺らしたのだ。

「誰かいるのか？」

鳥はその茂みに向かってそう聞いた。すると返事の代わりに、再び茂みの揺れる音と共に、翼ではためく音が聞こえた。

「羽音……？　鳥が居るのか？」

鳥の気分は一気に下がった。自分以外には居ないと思っていたのに、やはりこの島にも鳥は居たのだ。また迫害の日々が始まる……。しかし、その羽音はこちらには向かってこず、島の内部に逃げるように消えていった。

「……逃げた？」

羽音が遠ざかったことで、暗い感情が湧きだしていた鳥の思考が冷静になった。

なぜ逃げる？　逃げる必要などないではないか。迫害されるのはいつもこの鳥の方、他の鳥は数にものを言わせて笑っていればいい。しかし、茂みから聞こえた羽音の主はそれをしなかった。

気付くと鳥は、羽音を追いかけて飛び立っていた。羽音の主と会って何をしようと思った訳ではない。単純に気になったのだ。

羽音の主は、鳥が追いかけてきたことに気付き、一層大きく翼をはためかせて森の中を飛んだ。間違いなく鳥の羽音だ。虫はこんなに大きな音を立てて飛んだりしない。

突如始まった鬼ごっこは、数時間にも及んだ。

羽音の主は、けして島の森の中から上空へ出ようとしなかった。見つからないように、木と木の合間を縫うように飛び、鳥の追跡を撒こうとした。

鳥は鳥で、休まず飛び続けることに苦痛を感じなかった。疲労を忘れてしまうほどに、逃げる羽音の主のことが気になるのだ。

日が傾き始めた頃、逃げていた羽音の主が観念したのか、地面に降り立った音がした。

鳥は急いでその場に向かう。するとそこには、息を切らせて跪いている赤い鳥が一羽いた。

「許してください！ 許してください！ 私は何もできない、できそこないの鳥でございます！ 命ばかりはご勘弁をッ！」

跪いていた鳥が、声と体を震わせながらそう叫んだ。あつけにとられた嫌われし鳥は、何も言わず怯えた鳥を見つめた。

怯えた鳥の声を聞くと、雌めすの鳥であるようだった。風貌も小柄で飾り羽も少ない。

「わ、私は平和に暮らせればそれで良いのです！ けして迷惑をかけるようなことはいたしませんので、どうかこの島に置いてくださいッ！」

何も言わずにいると、嫌われし鳥が気分を害したと解釈したのか、雌の鳥はさらに体を震わせながら叫ぶ。この島に置いてくれということは、別の場所から来たのだろうか？

「お主はこの島に来たばかりなのか？ なぜこの島に来た？」

「は……はい。私の故郷は、海の方こうにある大陸なのですが、私はそこで虐げられていたのです……」

雌の鳥のその言葉に、嫌われし鳥は一瞬胸が苦しくなった。

* * *

『どうか……どうかお許してください！ 私はまだ死にたくありません！』

巨大な大陸の海岸線。その場所で、あまりにも異様な光景が広がっていた。ありとあらゆる鳥が集まり、海岸線を埋め尽くしていたのだ。

黒や白、青や緑、米粒に色を塗り、港の模型に器用に乗せていったかのような光景。それがかすんで見えなくなるくらい遠くの海岸

線まで続いていた。

しかしこれは模型などではないし、カラフルな色のつぶつぶは、色を塗った米粒ではなく鳥達だ。

鳥、鳥、鳥……数えることすら馬鹿馬鹿しくなるくらいの鳥達が海岸線に集まり、同じ方向に向かって叫んでいた。

『飛べ！ 飛んで行ってしまえ！ お前はあまりに汚らしい姿をしている！』

『見よ、この海岸線に集まった我々のお前に対する憎悪を！ 皆お前に対する嫌悪感で団結している。なかには、お互いが天敵である者たちでさえ、お前への感情では一致している』

『今すぐに消えろ！ さもなくば、俺達がお前を引き裂いてしまうぞ！』

鳥達は声を荒げて、口汚く呪いの言葉を吐く。たった一匹の赤い鳥に向かって……。

『お願いです！ 私は死にたくはないのです！ お邪魔はしません。姿もお見せしません。ただ、最低限の食事をし、誰の目にも触れない深い森の中で暮らします。なのでどうか命ばかりは……』

赤い鳥は港の海を飛びながら必死に叫び、なんとか陸に戻ろうとして近付く。しかし、何度近づいても、罵声と共に追い返されてしまうのだ。

『目に触れなければいいという訳ではない！ お前の体から発生する臭いですら不快感を覚えるのだ。お前はただ存在するだけで害を撒き散らす！』

赤い鳥は追い返されても必死に叫ぶ。

『臭いが気になるというのなら、一日に三度水浴びをします。羽が抜け落ちても気にしません。臭いが落ちるまで水を浴びて、それでも臭いが消えないというのなら、花の蜜を浴びてごまかします。ですから……』

『黙れッ！　そういう類たぐいの臭いではないわッ！　薄汚い体から発生する、負け犬のような臭いが耐えられないのだ。それはどれだけ洗っても、どれだけ花の蜜で誤魔化してもお前から漂い、我々を不快にする！　それを断ち切るには、お前を海の方こうに追いやる他ないのだ！』

海岸の鳥達は、それに同調して鳴き声をあげる。その声は、赤い鳥を排除しようという攻撃的な思いも感じられた。

『そんな……』

赤い鳥は絶望的な声で鳴く。

『早く消えてしまえ！　我々は何もお前に死ねと言っているのではない。この大陸から出て行けと言っているのだ。運が良ければお前にぴったりの島が見つかるかもしれないぞ？』

この大陸から出たことのある鳥などいない。海の方こうに島がある補償などない以上、鳥達は死ねと言っているのと同じこと……。しかし結局赤い鳥は抗うことができないまま、果てしなく広い海に向かって飛んで行くことになった。

* * *

「そうしてたどり着いたのがこの島でございます……」

自分がこの島にたどり着きたいきさつを語り終え、雌鳥はほろりと涙を零した。

「果てしなく続く海の上を、千切れるほど首を振りながら陸地を探して飛びました。そうしてようやく見つけたのがこの島でございます。やっと平和に暮らせる地が見つかったと思いましたが、貴方様を見つけて……」

雌鳥にとつて他の鳥は恐怖の象徴。何もされていなくても恐怖を駆り立てられる存在なのだ。

「朝も昼も夜も貴方様のために働きます！　けしてご迷惑をかけま

せん！　なのでどうか私もこの島に置いてください！　私は生きたいのです！　どれほど絶望的な世界であっても、死後の世界に比べればきつと幸せに違いないのです！」

雌鳥は再び体を震わせる。

「私は今苦しまずにここで息をしたいと思います。これが死後の世界ならどうでしょう？　空気も無く、永遠にもがき続けなければならぬ世界かもしれません。私達は飢えますが、食べ物を探せば見つかります。これが死後の世界ならどうでしょう？　食べ物はなく、永遠に飢餓に苦しまなければならない世界かもしれません。私はそれを思うと、堪らなく恐ろしいのですッ！」

それは本心の様であった。雌鳥の口調は、とても嘘を言っているようなものではない。

「……似ている」

嫌われし鳥はすべての話を聞き終わった時、そんなことを呟いていた。

「あ、あの……今なんと？」

「私の境遇とよく似ているのだ。お主が今話してくれたものとな……」

嫌われし鳥は、自分がこの島に来るまでの話をした。すると雌鳥は、すっかり恐怖が薄れ、共感したようだった。

「では……貴方様も故郷を追われた身なのですか？」

「私の方が情けないさ。私は死ぬために海に飛び立った。しかしお主は、厳しい境遇の中でも生きたいと願っていた。お主の方が遥かに強い心を持っている」

「そ、そんなことはありません……」

雌鳥は褒められたことで照れてしまったのか、静かに俯いた。嫌われし鳥はそんな雌鳥のことをもう一度見た。

（本当に……似ている）

嫌われし鳥は心の中でそう呟いた。

境遇もそうだが、体に関しても、自分と目の前の雌鳥はよく似ている。赤い羽根をもち、自分よりは小柄だが、平均的な鳥の大きさよりは巨大だと思う。嘴や尾羽などの細部は異なるが、それは雄と雌の違いだと言ってしまえば納得できる。

もしや……この雌鳥が、自分の探していた仲間なのでは……？

「あの……もしよろしければ名前を窺っても構いませんか？」

嫌われし鳥が考え込んでいると、雌鳥がそんなことを聞いてきた。嫌われし鳥はそれに答えようと口を開いたが、あいにくと名前は出てこなかった。

「私には名前が無い。親鳥はすぐに居なくなってしまったし、他の鳥が私を呼ぶ時は、『穢らしい鳥』と呼べばすんでいたからな」

屈辱的な呼び方だ。まさかこの呼び名で呼んでくれとは言えない。……聞いておいてなんですが、私も名前と呼べるようなものはありません。貴方様と同じで、悲しい呼び名で呼ばれていたのです」

雌鳥の表情が少しかげる。しかし、その後で明るい表情を作って言った。

「私達で名前を考えませんか？」

「名前をか？」

「はい、これからここで暮らすのですから、一緒に行動することも多いと思います。そんな時に名前が無いのは不便だと思いますので」

「そうか……名前か……。うむむ、急に考えろと言われてもな……」嫌われし鳥は首をひねって考えたが、なかなか思いつかない。

「実は、私に少し考えがあります。私の故郷の神話に、『鳳凰』^{ほうおう}という赤い聖鳥が登場します。この聖鳥は二羽の赤い鳥のつがいで、『鳳』^{ほう}が雄。『凰』^{おう}が雌でございます。この漢字を名前に使うのはどうでしょう？ その、私達の姿もよく似ていますし……」

雌鳥はそう言って、はずかしように視線をずらす。雌鳥の方も、

自分はもしかしたら仲間の鳥なのではないかと思っていたらしい。
「良い考えだな！　しかし、神話に登場する聖鳥か……。私達がそんな漢字を使つてよいのだろうか？」

「この島には文句を言う者はいません。堂々と名乗つて胸を張りましょう！」

雌鳥はそう言った。案外、したたかな性格をしているのかもしれない。

「ふーむ、そうだな……。ならば、私の国の風習も取り入れよう。私の故郷では、男が生まれると『郎』。女が生まれると『子』という漢字を使うことがある。どうだろうか？」

「素敵だと思います！　私の国の文化だけでは申し訳ないと思つていましたので」

雌鳥は嫌われし鳥の申し出を喜んでくれた。

「では私は『鳳郎』。お主は『凰子』……か？　うーむ、私の方とはかく、お主の方は語呂が悪い気がするな……」

「では、私の方の読み方を変えましょう。凰という字は、『こう』とも読みます。私のことは『凰子』とお呼びください」

「よし決まった！　今から私は鳳郎。そしてお主は凰子だ。これからよろし……うわッ！」

名前が決まった途端、凰子は鳳郎に飛びついた。

「ああ、嬉しい。私は今日から迫害されることも無く。貴方の……鳳郎のような心強い仲間を得て暮らすことができるのですね？」

「……そうとも。私だってお主のような……凰子のような仲間と出会ひ、幸せに暮らしたいとずっと願っていたのだ……」

自然と二羽の瞳から涙がこぼれおちた。どれほど願つただろう？　ともに悲しみや喜びを共有できる仲間と巡り合えることを……。今この瞬間、この赤い鳥達はそれを手に入れることができたのだ。

「今日から……」

「私達は……」

「二羽^{ふたり}で鳳凰！」

二羽の鳥の赤い羽根は、太陽の光を反射して、燃えるように美しく輝いていた。

第三話『遭遇』（後書き）

ここまでで、第一部完という感じですが

大体三丁四部構成で考えています

第四話『日常』

鳳郎ほうろうと凰子こうしが出会ってから、二年以上の時間が過ぎた。

その間にこの二羽の赤い鳥は愛をはぐくみ、二度卵を産んだ。卵の数は二度とも四つ。そのすべての卵が無事に孵り、島に住む赤い鳥の数は全部で十羽となった。

そして今年も凰子が三つの卵を産み、鳳郎は心から幸せを感じていた。

しかし、大きな幸せを噛みしめている中で、鳳郎は小さな不安を抱えているのだった。

* * *

「父さん。今日はこれくらいで良いんじゃないですか？」

一番目に生まれた息子鳥 名前を敬介けいすけという が、今日集めた食料を見ながら鳳郎にそう言った。

「ふーむ、そうだな。あまり採りすぎるのも良くない。母さん達も腹を空かせているだろうから、戻るとしよう」

鳳郎はそう言うと、あたりで食糧探しをしている子供達を呼ぶために、一声鳴いた。

「んー！ やつと終わりかあ。今日は暑いし、この後は水浴びに行こうかな」

傍に居た五番目に生まれた娘鳥 名前を茜あかねという が、バサバサと羽をはためかせながらそんなことを言う。すると敬介がたしなめるように茜を睨んだ。

「まったくお前は……ろくに食料を探もしないくせに、休むことばかり考えて……」

「えー、でも敬介兄さん。せっかく集めた食料を、他の小動物に取られないように見張るのも立派な仕事です。私が働いていないよう

に言つて、偉ぶるのはずるだと思います」

「見張りは三羽もいらぬ。俺と父さんだけで十分だ」

「……それがずるいつて言つてゐるんだけどなあ」

茜が呟くように不満を口にする、敬介がさらに小言を言う。茜は舌を出してそっぽを向き、果物をいくつか掴んで飛びあがつた。

「あ、コラ！ まだ話は終わつていないぞ、何処へ行く！？」

「母さんに食べ物を届けに行くのです。私はその後で、自分の食べ物を探しますよ」

敬介は後を追つて叱りつけたい衝動にかられながら、この場を離れる訳にも行かず、翼をはためかせた。

「父さん！ あんなわがママが許されるのですか？」

しばしの葛藤の末、敬介は微笑ましそうに兄弟のやり取りを見ていた鳳郎に、自分の不満をぶつけることにした。

「あいつは兄弟の中でも一番甘えん坊だからな。食料を一番に持つて行つて、褒めてもらいたいのだろう」

「だから言つて、叱りもせず……」

「皆で集めた食料は食べずに、自分で食糧を探すと言つていたのだから、それが罰だということの良いではないか」

「父さんがそのように甘やかされるから……」

「やれやれ、また言つてゐるのですか兄さん？」

鳳郎の呼び声を聞き、食料を探していた他の二羽も歸つてきた。

六番目に生まれた息子鳥 名前を周しゅうという が、呆れ顔で兄を見ながら地面に降り立つ。

「茜姉さんのわがママは今に始まつたことではないでしょう？ そのように怒つてばかりいては、兄さんも疲れてしまふでしょうに……」

「だから言つて放つておくわけにもいかないだろう！ 叱る者が居なくなれば、あいつはいつそダメになつてしまふぞ！」

「ふう……」

これ以上反論すれば、兄の怒りの矛先が完全に自分に向くことを

知っている周は、そこで沈黙する。

「父様、これ……」

最後に生まれた娘鳥　名前を澄乃^{すみの}が、小さな木の実を鳳郎に差し出す。

「おお、私の好きな木の実だな。ありがとう！」

「はい……」

褒められた澄乃は、顔を伏せて照れる。鳳郎はそんな娘鳥の頭を、軽く撫でてやった。

「お前達は先に戻っていてくれ。私は祠^{ひこ}によつてから帰ることにする」

「はい、分かりました。母さんにもそう伝えておきます」

敬介がそう答え、子供達はそれぞれ自分達の分を掴んで飛んで行った。

鳳郎はそれを見送ってから、島の中央に向かって飛んで行った。

* * *

島の中央にはとても高い崖があり、そのてっぺんには、鳳郎が二年前に作った祠がある。

とは言つても、別に立派なものではない。細い木を何段にも組み上げ、太い木の枝をそこに立てただけのものだ。

しかし、それだけのものを作るのも、鳥にとつては重労働だった。それに、大切なのは見た目ではなく、どのような思いを持ってそれを組み上げたかだ。鳳郎はこの祠に祈るのを忘れた日はない。

鳳郎は祠の場所につくと、食べ物をいくつか供え、姿勢を低くして祠に礼をする。

「女神様。今日も健やかに過ごすことが出来ました。病に倒れることなく、嵐に襲われることも無く、私達は幸せに暮らすことができ

ています。これもすべて、この地を与えてくださった女神様のおかげでございます」

鳳郎は淡々と祈りの言葉を口にする。子供達の中には、そんな鳳郎の姿を奇妙な目で見て、笑う者もいる。

鳳子さえも、直接馬鹿にして笑うようなことはしないが、女神の存在は信じていないらしい。実際にその姿を見ていないのだから無理もないが……。

実際に女神の姿を見、その言葉を聞いた鳳郎だけが、女神に対して敬いの心を持っている。

「さて……」

鳳郎はいつもの祈りを終わると、大きく羽ばたいて空に舞い上がる。

中央にそびえるこの崖からは、島のどこにでもすぐに向かうことができる。向かうは愛すべき家族の待つ場所だ。

爽やかな風と暖かな日の光を浴びながら、鳳郎は優雅に飛ぶ。いくら飛ばないうちに、目的地に着くことができた。

「ああ、鳳郎。おかえりなさいませ」

ずっと巣の中で卵を温めていた鳳子が、鳳郎の姿を見つけて頭を下げる。子供達は食事をしているところだったらしい。

「ただいま鳳子。変わったことはなかったか？」

「はい、とても穏やかに過ごさせていただきました。……すみません、私はずっと巣の中で休んでいて……」

「何を言う。お前には卵を温めるといふ大切な仕事があるではないか。むしろ、外に出してやれなくて済まなく思う」

「ふふ……大丈夫です。子供達が話相手になつてくれますので」

鳳子の横には、二番目に生まれた娘鳥 名前を菜穂なほというがちょこんと座っていた。そして、その後ろに隠れるように、先ほど餌さがしをしていた末の娘の澄乃も座っている。

「お父様。今度生まれてくる雛達は、何羽が雌で何羽が雄でしょうか？」

菜穂が鳳郎に向かってそんなことを言ってきた。

「さて……そればかりは生まれてみないと……。お前はどちらが多い方が良いのだ？」

「もちろん雌鳥メスが多く生まれた方が嬉しいです。今の兄弟は、雄オスが五羽も居るんですよ？　しかも、茜あんな性格ですから、落ち着いた話ができます。今も虫を追いかけたり、水を勢いよく浴びたりしているでしょう」

菜穂は、後ろに隠れている妹鳥の澄乃を優しい目で見ろ。

「私はこの子のような妹が欲しいと思っっているのです。次に生まれる兄弟は、絶対雌メスが多い方が良いです」

「わ、私は茜姉様も素敵だと思います！」

澄乃は、菜穂の視線を避けながらそう言った。すると菜穂は、そんな澄乃に体を寄せる。

「まったく……お前は どうしてそんなに可愛いのですか！」

「ね、姉様……やめてください……」

澄乃は、菜穂から逃げるように飛び立っていった。

菜穂は、鳳郎と凰子に一度頭を下げ、愛しい澄乃を追いかけて空に舞い上がる。なんだかんだいって、姉妹鳥三羽は非常に仲が良い。これから三羽で集まって遊ぶのだろう。

「ふふふ……賑やかでいいことですね？」

「ああ……そうだな……」

凰子の言葉に、鳳郎は少し齒切れ悪く答える。違和感を覚えた凰子は、首を傾げて鳳郎を見た。

「何か気になることも？」

「いや……その……な」

鳳郎は考え込むように空を見上げた。何かを言おうとしているのだが、言うべきかどうか迷っている様子だった。

「……言い出しにくいことなのですか？」

凰子はあまりに鳳郎が話をしないので、心配になってきたらしい。そんな凰子の様子を見て、鳳郎はようやく話す決意を固めた。

「実は……新しい島を探そうと思うのだ……」

第五話『責任』

早朝。まだ太陽も昇らず、あたりが薄暗い中、鳳郎は島の中央にある祠ほくらに居た。

いつものように祈りの言葉を口にする訳でも、供え物を持ってきた訳でもない。ただ目を瞑り、静かに祠と向き合っていた。

「父上……」

鳳郎がしばらくそうしていると、三番目に生まれた息子鳥 名前を博ひろしという がやってきた。

鳳郎がそちらに顔を向けると、不快そうな表情をしてこちらを見ている。博は、鳳郎が祠に祈るのを良く思っていないのだ。

「やはり、ここに居ると思いました」

「予想が外れて欲しかったという風な顔をしているぞ。そんなに私がここに来るのが気に入らないか？」

「父上がこの場所に来るのを止めるのはとうの昔に諦めております……嫌悪感を抱かずにすむようになるには、まだまだかかりそうです」

博の言葉に、鳳郎は思わず苦笑する。それだけ自分の今の姿は不気味に見えるのだろう。

鳳郎は昨日の凰子とのやり取りを思い出す……。

* * *

「新しい島を探す……？ なぜそんなことをする必要があるのですか？」

鳳郎の『新しい島を探す』という突然の言葉に、凰子は困惑した。「前々から思っていたことだ。このまま家族の数が増えていけば、間違いなく食料が足りなくなってしまう」

今島には十羽の鳥が居る。現時点においては、食料が足りないなどということはない。むしろかなり余裕がある方だろう。

仮に、今凰子が温めている卵すべてが孵り、そのすべてが順調に育ったとしても、まだ食料は足りると思う。

しかしその先になると苦しくなってくる……。その前に、何か予想だにしない事件が起こり、食料が急に足りなくなるということも十分考えられる。そうなることは何としても避けたい。

「食糧問題は重要だ。食べ物が無くなった時、十羽もの子供達をどうやって育てる？ 私達には、子供を作った以上は育てる責任がある。その責任を果たすためにも、新たなえさ場と住処は見つけておいた方が良い」

「ですが……まだ余裕はあるのですから……」

「お前の気持ちも分かる。島を探すということは、海の上を飛ぶということだ。それには間違いなく危険が伴うだろう。しかし、だからこそ余裕があるうちに取り掛かりたいのだ」

現段階では余裕がある。だからこそ、危険な『新島探し』にも慎重に取り掛かれる。危険なことはせず、安全を第一に考えて行動できる。

これが追い詰められるとそうはいかない。一日も早く新島を見つけないければと焦り、結果危険なこともしくはならない。そうなれば犠牲が出る可能性が高くなってしまふ。

「それに、私達には女神様が付いている。きっと加護を与えてくれるに違いない」

「……………」

凰子の表情が曇る。女神の存在を信じているのは鳳郎くらいだ。だから女神の名前を出しても、安心させるどころか不安を煽ってしまふのだ。

「鳳郎……。あなたが何を信じていても、何を拠り所にしても

私は文句を言いません。しかし、私には信じられないのです。女神などという存在が本当にいるのでしょうか？ あなた以外……あなたさえも、一度しかその姿を見ていないのですよ！？ それも夢うつつとも言える極限状態の中で一度きりです。私にはそんな不確かな存在が、加護を与えてくれるとはとても思えません！ そんな根拠のないお守りを持たせて、危険な海の上を飛ばせる訳にはいきませんッ！」

鳳子は必死に訴えかけた。やはり安心させるどころか、錯乱させてしまったようだ。

鳳郎はなだめるような口調で言った。

「そうだな。きっと女神様は私達を守っては下さらないだろう。お前の言う様に、存在自体も怪しいのは確かだ」

「だつたらッ！」

「だがな、そんな不確かな存在でも、心を落ち着かせることくらいはできる。実際に守ってもらえることはないかもしれない。……だが、それでいいのだと思う。神や仏というのは、信仰することにより心の不安を和らげ、安心することができる。もし祈るだけで加護が与えられるなら、それに頼って墮落してしまうかもしれない。だから、心が安らかになるくらいが健全で良いんだよ」

鳳郎は女神の存在を信じてはいる。だが、その女神が実質的に何かをしてくれることをあまり期待していない。

女神は静かに見守ってくれている……。見えない所で……実感のない所で助けてくれている。そう信じて心を落ち着かせることこそが女神の役割。だから、女神が存在しているか存在していないかは大きな問題ではないのだ。

そんな鳳郎が今でも祠に出向いて祈るのは、加護を与えて欲しいというより、感謝の念を伝えたいという気持ちが大きい。女神に出会ったあの日に、自分が幸せを手に入れられたことは間違いないのだから。その後、加護が与えられていなかったとしても祈りをやめ

る理由はない。

「無理はしない。実は半年前から体力を付けているのだ。ちょっと海の上を飛んでみるだけさ……」

「……本当ですね？ 危ないことはありませんね？」

鳳郎になだめられ、凰子はやっと納得する。鳳郎の言う食糧問題が重要なのは凰子も分かっている。近い将来、食料が不足することとが分かっているなら、親の責任として子供達のために多少の危険を冒さなければならない。

「ねえ、パパ、ママ……」

話がまとまると同時に、後ろから声をかけられた。

声をかけてきたのは、七番目に生まれた息子鳥 名前を智一と
ともかず
いう だった。その表情を見ると、今の会話はすべて聞かれています。らしい。

「パパお出かけしちゃうの？」

「そうだよ、このままでは島が狭くて住めなくなってしまうからね。ご飯も足りなくなってしまうかもしれない。そうなるのは嫌だろう？ そうならないためにパパはお出かけするんだ」

「でも、危ないんでしょ？」

智一は、心配そうな表情をして父親を見つめる。

鳳郎と凰子は、危険だから決して島から離れてはならないと教えられている。海の天気は変わりやすい。海で飛んでいる時に突風にあおられて、海に落ちてしまったら命を落とすことになる。

そのことを強く言いつけられているから、その海に向かって父親が出かけることを心配しているのだ。

「大丈夫だよ。パパは海の上を飛んだことがある。そんなに遠くまで飛ぶことはないし、絶対に帰ってくるから」

「……………」

鳳郎は必死に慰めるが、息子の不安そうな表情は和らぐことが無

い。

「新しい島を探すんだよね？ でも、そんなことをしなくたって、パパとママが住んでた場所に行けばいいんじゃないの？」

智一の指摘に、鳳郎と凰子が息を飲む。

「パパは言ってたよね？ パパの住んでいた所はとても綺麗な所で、自然がたくさんあって空気も澄んでる。食べ物だってここよりたくさんあって、食べ物に不自由したことはないって言ってたよ。ママも行ってたよ。ママの住んだところは、パパの住んでいた場所より遥かに広い場所だったって。何処までも何処までも陸地が続いて、まだ見たことが無い場所の方がずっと多いんだって」

鳳郎と凰子はどう答えたものか少し悩む。子供たちの素朴な疑問の一つが、父や母が住んでいた場所はどんな風で、そこでどんな暮らしをしていたかだ。

しかし、鳳郎も凰子も自分達が住んでいた場所がどんな風だったかについては語っても、そこでどのような暮らしをしていたかについては話そうとしなかった。

それも当然だろう。毎日毎日生きるのに必死。仲間を持たず、他の鳥達からは迫害されてきたのだ。鳳郎は逃げるように、凰子は追い出されるようにしてこの島にやってきた。

そのことを知れば子供達は間違いなく傷つく。自分達は嫌われた生き物だということを知れば、誰だってショックを受けるのは当たり前だ。

だから鳳郎と凰子は、『ここでの暮らしが楽しすぎて、昔のことは忘れてしまった』と答えてお茶を濁している。知りたがりの子供達が、それで納得する訳もないが……。

「……そうだね。確かにパパとママの故郷に行くのも一つの選択肢だ。でも、パパとママの故郷は危険なことも多いんだよ。だから、

お前達が大きくなるまでは、安全な場所で育ててあげたいんだ。そのためパパは出かけなくちゃいけない。分かってくれるね？」

「……………」

苦しい言い訳だ。しかし、鳳郎の諭すような口調にしぶしぶ納得したのか、智一はそれ以上何も言わずに、どこかへ飛んで行ってしまった。

「…………ごめんな」

飛んで行く我が子を見ながら、鳳郎は小さくつぶやく。

自分達の故郷に行く。それも確かに選択肢の一つだ。どうしようもなくなれば、その選択を取らざるを得ないだろう。

そもそも、鳳郎や凰子が差別されていたのは、仲間を持たなかったからだ。今は十羽の仲間が居る。体も大きい、か弱い存在だという訳ではない。だから、今家族全員で故郷に帰れば、前のような扱いは受けないかもしれない。

それに、他の仲間を探したいという気持ちも再び生まれた。こうして鳳郎と凰子の間に子供が生まれたということは、二羽は同じ種類だったということ。世界のどこかには仲間がたくさんいるのかもしれない。何かの間違いで、鳳郎と凰子とはぐれてしまった可能性が高い。

仲間の群れを探すことができれば、子供達も立派に独り立ちして、相手を見つけ、愛をはぐくみ、子孫を残すことができるようになる。しかし、まだ早い気がする。好き嫌い感情というのは根強いものがある。今故郷に帰れば、言われない迫害をもう一度受けることになるだろう。もう少し家族を……仲間を増やしてからにしたい。これだけ臆病にならざるを得ないトラウマが、鳳郎と凰子にはあるのだ。

「鳳郎……きつと帰ってきてくれますね？」

「ああ、必ず帰ってくるよ」

凰子は最後にそう尋ね、必ず帰ってくることを約束した鳳郎に、

それ以上何も言わなかった。

*

*

*

「父上？」

「ん？ ああ、すまない。考え事をしていた」

博の声で、鳳郎はやっと回想から帰ってきた。

まだ日も昇っていないくらい早い時間なのだ。わざわざ起こしてまで、鳳子に旅立ちの言葉をかけることもあるまい。

鳳郎は出かける前に、もう一度祠に顔を向ける。

「女神様、私はこれから新しい住处を探すために旅立ちます。さして長い時間ではないでしょう。ですが、海の上を飛ぶのは常に危険が伴います。もし熱心な信者である私を思ってくださいるのなら、無事に飛びきる加護をお与えください……」

「……………」

鳳郎がすべてを言い終わるまで、博は顔を背けて聞いていた。やはり来なかった方が良かったかもしれないと後悔しているのだろうか？

「お前の嫌いな時間が終わったぞ。すまないな、せつかく見送りに来てくれたというのに……」

「私が好きでしていることですので、気にすることはありません」

危険な所に旅立つと知っていて、黙って送り出すことはできない。自分は同行できずとも、せめてしっかりと見送りたいのだ。

「後のことは頼んだぞ。そう長くは留守にしないと思うが、何かあったら兄弟で力を合わせて母さんを守ってくれ」

「任せてください」

「心配すんなって、親父！」

明るい声と同時に、兄妹の中で四番目に生まれた息子鳥 ふみや 名前を文哉という がやってきた。

「生まれたばかりの目の開いてない赤ん坊じゃあるまいし、一日親父が居ないくらいで問題が起こったりしないって！ それでも何かあった時は、俺達一年組がなんとかするからさ！」

一年組とは、一年目に生まれた子供達のことを言う。成長の早い鳥達にとつて、一年の差は大きい。有事の際には一年組と鳳郎が解決することになっている。

「……お前の言葉はいつも軽い。そんな調子外れの言葉では、父上を心配させてしまうじゃないか」

「へえーへえー、兄貴の言葉はいつもいつも重たくってよろしいことですね。あんまり重たくって心まで沈んでしまいそうですよ」

この文哉は楽天家だ。何でも気楽に考え、重たい空気を和ませてくれる。二女の茜とよく気があう。

「フフ……。それでは後を頼んだぞ、行ってくる」

「行つてらっしゃいませ」

「行つてら〜」

文哉が博に小突かれるのを見ながら、鳳郎は海に向かって飛び立つていった。

*

*

*

鳳郎が飛び立つてから数時間が過ぎた。太陽は完全に登り、広く海上を照らしている。

鳳郎が死ぬために飛び立ったあの日とは違い、空はどこまでも晴れ渡り、雲ひとつない心地よい空だった。これなら嵐にあうことはまずあるまい。海の天気は変わりやすいため、そう樂觀視もできないが……。

「……………」

鳳郎はかなり高めに飛ぶ。そしてゆっくりと首を振りながら、何か変わった者が無いかを探す。

しかしこれまでの間、島はどころか、小さな岩や木の板すら見つけることは出来なかった。360度見渡しても、何処までも水平線が続いており、波は静かに揺れている。

「まあ、こんなものさ」

鳳郎は特に焦りもせず、冷静に海を見回している。

実際のところ鳳郎は、今日中に島が見つかるなど微塵も思っていない。

焦る必要が無い様に、余裕があるうちに行動を始めたのだし、今日のところは海の上を飛ぶ感覚を覚えようとしている要素が強い。今のところは、潮風に煽られても疲れることなく、心地よく飛ぶことができている。

「少し神経質になりすぎていたか？」

今のところ大きな危険はない。これなら子供達のうちの数羽を一緒に連れてきても良かったかもしれない。

子供達は長距離を飛ぶことに慣れていない。島が見つかったとしても、そこまで飛んで行くことができれば結局意味が無いのだ。ならば、長距離を飛ぶ訓練をさせる意味でも、連れてきても良かったかもしれない。

「そのあたりも含めて、家族で話し合ってみるか。あまり凰子に心配はかけたくないしな……ん？」

鳳郎が考え込んでいると、水平線の近くに何かを見つけた。ぼんやりとしてはつきりとは見えないが、それは影であるように思われた。島の影のように……。

「まさか……こんなに簡単に？」

むしが良すぎる。新しい島を探すために飛び立ったその最初の日、目的のものが見つかってしまうなど……。

「とにかく行ってみよう！」

もしかしたら、凰子の住んでいた大陸かもしれない。これほど遠くから見えるのだ、その可能性は大いにある。

鳳郎はできるだけ高く飛び上がり、その影に向かってはばたき始

めた。

しかし数時間後経っても、その影が近づくことはけしてなかった。なぜだろうと首を傾げていたが、やがてその正体に思い至った。

「……蜃気楼だ」

それに気付くと一気にだれた。鳳郎は蜃気楼というものを見たことが無いが、蜃気楼によつては鮮明な町が見えたりもするのだという。島の影くらいなら当たり前にあり得るだろう。

蜃気楼だと気付くと、島の影がゆらゆらと揺れているのが分かった。それに気付かなかった自分が非常に愚かしく思えた。

「引き返すか……」

鳳郎は一言呟いて方向を変える。気力は萎えたが、鍛えたおかげで体力はまだまだ残っていた。蜃気楼のせいで、自分の中の予定より遙かに長い間探索していたが、自分の限界を知ることでもできた。落ち込んでばかりいないで、前向きに考えることにしよう。

帰り道に道しるべはないが、道に迷ったりはしない。方向感覚は他の鳥にも引けを取らないくらい優れている。だからこそ、恐れることなく飛び立つことができたのだが……。

探索と同じだけの時間をかけて、自分が今来た空に戻る。すると今度は別の奇妙なものを見つけた。

「大きな雲だな」

黒々とした巨大な雲。運が悪いことに、その雲は鳳郎が今向かっている方向にある。

あれだけ巨大な雲なのだから、その下は激しい嵐になっただけもおかしくない。雷に打ち落とされてはかなわないし、あの方向にあるということは、島を直撃することもある。早く帰って嵐に備えなくては……。

鳳郎は羽ばたく翼に力を込めて、帰り道を急いだ。

島が近づくにつれて、その黒い雲も近づいてくる。そして、相当な距離まで近づくと、鳳郎の中に疑問が湧いた。

「あれは……本当に雲か……？」

雲にしてはおかしい。もくもくと空に向かって立ち上って行き、雷の光がまるで見えない。その黒い雲以外には雲が見当たらず、相変わらず快晴だ。雲というよりは……。

「煙……なのか？ あれは……」

煙……そう考えればそのように見える。

煙……煙……煙……。

煙の発生する条件は何だ？ もちろん火だ。何かが燃えている時に煙は発生する。それは常識。

ならば……何が燃えているのだ？ 間抜けな人間の船が、料理をしている途中で火事になってしまったとも言うのか？ それならば傑作だ。近くまで飛んで行って笑ってやりたいくらいだ。

しかしあの煙の量……人間の船が一隻燃えたくらいではあの量の煙は発生しない。

それならば……。

「まさか……まさか島が……島が燃えているとも言うのか？」

最悪な想像が鳳郎の頭をよぎった。

そして……その想像は鳳郎のことを裏切ってはくれないのだった。

第六話『雨島』

それこそ屋気楼か何かであって欲しかった。しかし現実には、その願いを裏切って残酷だった。

近づけば近づくほどその煙は巨大になり、ぼやけて消えてしまうところか、ますます鮮明にその漆黒の姿を見せつけてきた。

炎はすでに何時間も前についたものらしく、すでに島中が真っ赤な炎に包まれていた。

もくもくと立ち上る煙の中で、荒々しい炎が混ざって踊る。その炎と煙は、まるで生き物のように島中を暴れ回っていた。

「凰子おーー！」

鳳郎は壮絶な島の状況を目の当たりにして愕然としていたが、やがて我に帰って最も愛すべき者の名前を叫んだ。

「どこだあー！？ どこにいるーー！」

鳳郎は島の上空を旋回しながら島の姿が無いかを探す。

島はすべて炎と煙に包まれている。避難する所などどこにもない。だから愛すべき家族達は、島に居るはずが無いのだ。必ず島の中から逃れて、空に待機し、島が落ち着くのを待っているはずなのだ。

「私だ！ 鳳郎だ！ 誰でもいいから返事をしてくれえ！」

鳳郎はひたすら空に向かって叫んだ。しかし、誰からも返事が返ってこない。

空に避難したからと言って、島の近くから離れる理由はないはずだ。だって、自分達には逃げるあてが無い。

鳳郎の故郷に行ったのか？ 凰子の故郷に行ったのか？ いや、そんなはずはない。家族の中には特別空を飛び続ける体力が低いものもいる。これから徐々に訓練を積んで行く予定だったが、そんな暇はなかった。

だから目の前の足場を見捨てて、何時間飛ぶことになるかも分か

らない親の故郷に飛んで行く判断をしたとは思えないのだ。

それならば……家族の姿が空に見当たらないのであれば、家族が居る場所は一つしかない……」

「まさか……まだ島の中に居るとでも言うのか……？」

最悪な想像が頭をよぎり、鳳郎は大慌てで島に向かって降りて行った。

いざ島に降りようとすると、島に近づくことさえなかなか困難だった。何しろ島中が燃えて、熱を放っているのだ。降りようと思っても、焼けるような風に吹かれて上陸することができない。

「こんな島の中に居るはずが……」

そうは言っても空には家族の姿はなかった。何が何でも島に上陸しなければならぬ。

鳳郎ははじめ、自分達の巣に降り立とうとしていた。しかしそれはすぐに断念した。巣はかなり島の中央に位置している。いきなりそこに降りようとしても、熱風が邪魔をして降りることができない。だから鳳郎は、島の横から上陸し、巣に向かって進もうとしていた。

それに、島の端は炎が比較的少ない。もしかしたら、そこに家族達は避難しているのかもしれない。

「おい！ 誰がいるかー！？」

島に降りたって、すぐに声をあげる。しかし返事は聞こえてこず、気がパチパチと焼ける音や、枝が焼け落ちて地面に落ちる音だけがむなしく響いた。

「クソッ！」

鳳郎は急いで飛び上がり、巣に向かってはばたき始めた。巣に向かう途中も声を張り上げ、家族達を呼ぶ。体力を消耗して

しまうが、そんなことを気にしている暇はない。

「ん？ なんだあれは……」

木と木の間から何かが見えたような気がした。返事が返ってこないのだから、家族ではないようだが、なんだかその正体が気になった。

鳳郎は方向転換をして、その場所に向かった。

「たしかこのあたりに……。！？ こ、これは……」

そこにあつたのは焚火の後だった。故郷に暮らしていた時に何度も見たことがある。人間達が石を組み、そこに空気が良く通るように木の枝をさらに組んで火を付ける。

無論、鳳郎達は焚火などしない。炎を使うことなどないし、そもそも扱えるはずが無い。だからこの焚火の後には、ここに人間達が来たという証だった。

「クソ……人間達がやってきてここで火を焚いたのだ！ 間抜けどもめ……居眠りでもしている間に火が島に燃え移ったに違いない！ ろくに火が扱えないというなら、猿のままでいればいいものを……」

島が燃えた原因を知って、鳳郎は激しく憤った。さっき島の周りを見たが、船の姿はどこにもなかった。島に火が燃え移ったのに驚き、早々に逃げ出したのだろう。

しかし人間が来るとは珍しい。二年間ここで過ごしていたが、人間が来たことなど今まで一度もなかった。まあ、今まで人間が来なかった方が逆に不自然ではあるが……。

「それにしても……」

鳳郎はたき火跡を見下ろして首をひねった。人間達はなぜ焚火をしたのだろう？ 今は焚火を起こして暖を取る必要などない季節だ。他に人間が焚火をする理由があるとすれば、川に落ちて濡れた服を乾かすためか……。

「……そんな……嘘だ……」

他の生き物を焼いて食べるためだ。

魚やキノコ……そして、鳥などを……。

「うわああああああッ！」

鳳郎は叫び声をあげて自分の目に飛び飛んできたものに抱きついた。

それは地面に転がっていた。体中の羽をむしり取られ、首と翼を切り落とされ、その切り落とした首の部分から串が刺されて尻まで貫通していた。

「ああ……ああ！」

その無残な姿を晒している死体は、地面に投げ出されていた。体中が黄金色になるように焼かれていて、その体には明らかに少しかじった跡があった。

その死体の様子から、とりあえず焼いて食べてはみたが、口に合わなかったので地面に投げ捨てたというのが良く分かった。

その死体は明らかに鳥のものだ。そして、この島には鳥は一種類しか居ない……。

「こんなことあるはずが無い！ どうして……どうしてこんなことが……」

体の大きさから言って、その鳥は一番目に生まれた子供、敬介であることが分かった。昨日まであれほど自信に溢れて生きていたというのに、今は何も言わずただそこに転がっていた。

「まさか……まさかッ！」

鳳郎は敬介をどうにかしてやりたいという思いをなんとか抑え込み、その場を飛び立った。

敬介がこうなっているということは、他の家族達にも危険が迫ったということだ！

それから間もなく別の死体を見つけた。今度は誰の死体かすぐに判別できた。その死体は羽をむしられてもいなければ、首を落とされてもいなかったからだ。

「博！ 文哉！」

二羽の死体は、重なるようにして転がっていた。体中に弓矢が刺さっている。

「狩り……人間達は狩りをしたのか……？」

それも、食べるために狩りをしたのではない。ただ殺すために狩りをしたのだ。食べるために狩りをしたのなら、こんなに体中に矢を打ち込むはずが無いのだ。

娯楽のためだけに狩りをした。鳳郎達は、その狩りの対象に選ばれたのだ……。

「こんな……こんなことがあああああ！」

鳳郎は半狂乱になって島を飛び始めた。今まで以上に声を張り上げ、遠くからでもよく見えるように大きく動きながら飛んだ。

しかし、家族達は鳳郎の姿を見つけてはくれなかった。見つけるのはいつも鳳郎の方だ。

鳳郎は巣に向かって飛んだ。その途中に、まるでそこから先に進ませまいとして戦い、そして敗れて戦死したかのように、子供達の死体が転がっていた。

菜穂、茜、周、智一、澄乃の順番にその死体を見つけた。早く生まれ順に戦ったのだろう。死体を見つけた順番からそう考えることができた。

鳳郎はある意味運が良い。この広い島の中、子供達全員の死体を見つけることは相当難しかったはずだ。それをたった数分のうちにすべて見つけることが出来たのだから、運が良いと言って間違いないだろう。

だが、当然。数時間のうちに、自分の子供達すべてが死んでしま

ったという不幸は変わらない。

「凰子オー！」

子供たちすべての死体を見つけ、鳳郎に残されたのは凰子だけだった。

鳳郎はようやく巢の場所まで戻ってすることができ、炎が燃え盛る中、必死に声をあげた。

「何処だー！ 何処に居るー！？」

「……こ……です」

消え入りそうな小さな声。だが鳳郎は確かに聞いた。

「凰子！ 何処だ！ 私はここに居るぞ！」

「……ここですよ……鳳郎……」

今度ははっきりと聞こえた。

鳳郎は声のした方に急いで飛んで行った。すると、凰子は巢の中に座り込み、最後に会った時と同じように卵を温めていた。

「鳳郎……ああ、こうしてまた会えるなんて……」

凰子は諦めていたらしい。鳳郎の姿を認めた瞬間、その瞳から一筋の涙がこぼれおちた。

「凰子、一体何が起きたのだ！？」

「人間……人間が来たのです……」

「それは分かっている。……子供達を見たからな」

鳳郎のその言葉に、凰子は頭を下げて泣いた。

「申し訳ありません！ せっかく鳳郎から頂いた……」

「言っな！」

鳳郎は凰子の体を翼で包み込み、慰めるようにさすった。それで凰子は少し落ち着いたらしい。

「ゆつくりと落ち着いて話すのだ。人間達は何をした？」

鳳郎の諭されるような口調を聞き、凰子はつかえながらも話し始めた。

「あなたが出かけてからすぐに、人間達の船がやってきたのです。荒々しい……見るからに乱暴そうな人間達でした」

人間達は上陸して、島を探索するようにしながら島の中央に向かって歩き始めた。

この人間達は何かを探しているようで、島を荒らしながらゆつくりと進んだ。

このままでは巢まで荒らされてしまう。そう考えた敬介は、人間達を追い返そうと提案した。

「私は反対しました。しかし、逃げだせば卵が割られてしまうと主張して、敬介は一羽飛び立って行きました」

すぐ後を博と文哉が追いかけた。もちろん敬介をつれ戻すためだ。人間達と争って鳥が勝てるはずが無い。しかし間に合わなかった。

人間達は、珍しい大きな鳥の姿を見つけると、躊躇することなく弓矢を構え、矢を放った。

敬介は体を打ち抜かれ、人間達めがけてまっすぐに落ちて行った。

「そして人間達は……人間達は……」

「その先は言わなくていい。……私も見てきた」

敬介は人間達に調理され、焚火の炎で焼かれた。そして、ゴミの様に捨てられたのだ。

「私達は憤りました。目の前で家族が殺されて、屈辱的なことまでされたんですよ？ 黙っているという方が無理ではありませんか！」

気持ちには分かる。鳳郎も実際その場に立ち会えば……いや、立ち会わずとも、その無残な息子の死体を見ただけで人間達に対する怒りでいっぱいだった。

「家族全員で攻撃に出ました。崖まで誘い込み、石を落として崖の下付き落とす。森の中に彷徨いこませて、底なし沼にはめ込む。これらは非常にうまく行って、人間達はかなりの被害が出ているように思えました」

実際は思えただけかもしれない。八羽程度の鳥が集まったからと

言って、たくさん人間達に被害を与えられるとは思えない。

しかし、実際人間達に被害は出た。そして人間達は理解した。「ああ、あの鳥は意思を持って自分達を攻撃してきているんだな」と……。

そうなれば例え鳥といえども、反撃しない訳にはいかない。鳥を殺すことを決定した人間達は、迷わず島に火を付けた。

「思いもしなかった反撃でした。私達は炎に全く慣れていません。あたふたとしているうちにあつという間に人間達にやられてしまったのです」

しかし、島に火を付ければ当然自分達の身も危なくなる。結局人間達は島の中央にたどり着けないまま、海に逃げ出してしまった。鳥達は自分達の巢を人間に犯されることだけは守ったのである。

「うう……」

凰子が苦しむようにその場に倒れ込んだ。

「凰子！ 無理に話させるようなことをしてすまなかった！ とりあえずここから逃げ出そう！」

しかし凰子は、鳳郎のその言葉に静かに首を振った。

「鳳郎だけで逃げてください」

「なぜだッ！？ もう生きることをあきらめてしまいうくらいに絶望したのか？ むしろお前の方が生きることに向きで、死を恐れていたはずではないか！ 共に逃げよう……私達はいくらでもやり直せるはずだろう……？」

しかし凰子は再び首を振った。

「駄目です……私は翼が折れてしまいましたから……」

鳳郎はそこで初めて、凰子の翼が折れていることに気付いた。こんな翼では当然飛べない……。

「人間達と戦っている時に折れてしまったのです。ここに帰ってくるのにもかなり体力を消耗してしまいました……。もう……無理です……」

鳳子はそう呟いて儚げに微笑んだ。すべてを悟ったように鳳郎には見えた。

「ならば……ならば私も死のう！ 何処までも離れぬ！ いつまでも離さぬ！ お前が死ぬというのなら、私もその隣で死ぬ！」

鳳子は表情を崩さなかった。鳳郎がそう言うのをなんとなく予想していたのかもしれない。

「生き物は皆、いつでも死ぬことができます。どう仕様もなく行き詰った時、生きることが苦痛でしかなかった時、そんな時生き物は、自ら死を選ぶ権利を持っているのです。……ですが、あなたのその権利を、私に奪わせてください」

「……なぜだ？ お前や子供達を失った私に、なぜ生きろというのだ？」

鳳子は悲しい表情を作って鳳郎を見る。そして、涙を零しながら訴えかけた。

「このままでは、あまりに悔しいではありませんか。……誰からも認められず、忌み嫌われ、住んでいた故郷を追い出される。そしてなんとか安息の地にたどり着き、ささやかな幸せの日々を手に入れたかと思ったら、これ以上ないくらい悲惨な方法で奪い取られる」

鳳子は頭を鳳郎の胸にうずめた。

「このまま死んだのでは、不幸になるためだけに生まれてきたようではありませんか！ 子供達はどのように生まれてきたのです？ 私達はどうして生まれてきたのです？ 幸せに生きるためではないのですか？ 嫌われし鳥として生まれ、嫌われし鳥として死ぬ。私はそれが非常に悔しい……だからあなたに託すのです。私達だって幸せに生きる権利があるのだということを証明して欲しいのです！」

「鳳子……」

鳳郎は何も言うことができなかった。鳳子のその声には思いが込

められていた。凰子は単純に鳳郎に生きて欲しいと言っているのではない。子供達のために……自分達のために生きて欲しいと言っているのだ。

ここで鳳郎も死ねば、それで鳳郎や凰子、子供達の存在は確定してしまう。暗く、悲しいだけの存在として……。

しかし鳳郎が生きればまだ可能性はある。まだ可能性は残るのだ。

「最後に……一言だけ言わせてください」

凰子は表情を緩めて鳳郎を見た。

「あなたと出会ってからの毎日は、嘘偽りなく、楽しいものでありました」

その時強い風が吹いた。

その風は、なぜか鳳郎の体だけを攫^{さら}い、一気に鳳郎の体を上空にまで押し上げた。

「凰子！ 凰子！ 私も……私もッ！」

鳳郎は必死に翼をはためかせたが風の勢いに勝つことはできず、ぐんぐん空高く押し上げられていく。同じ場所に居たはずなのに、凰子の体は少しも浮き上がらない。まるで、凰子が風を操って鳳郎のことを上空に逃がしたようであった。

「さあ、お前達……ごめんなさいね。あなた達だけは、お母さんが守るからね……？」

凰子は卵をしっかりと抱きしめ、優しい母親の声で声をかける。

実は凰子には罪がある。子供達は皆死んでしまった。怒りに囚われることなく、子供達の命を第一に考えていれば、きっと救うことができたはずだ。他の子供達が怒りで我を失ってしまったとしても、凰子だけはグッと自分を抑えるべきだったのだ。そして鳳郎の帰りを待ち、その胸の中で泣けばいい。しかし、凰子はそれができなかった。

母親失格。そう言われても仕方あるまい。だからこそ、この卵……

…この子供達だけは守って見せる。自分の命が尽き果てるその瞬間まで……ッ！

「凰子オー！ あッ！」

鳳郎は上空に押し上げられていく途中で見た。凰子と、その凰子を守っている卵に向かって、燃え盛る大木が倒れ込んで行くのを…。

「うわあああああああッ！」

鳳郎のその叫び声は、島に、海に、空にこだました。

島中を焼いた炎により、強力な上昇気流が生まれ、島の上に雨雲が発生した。

やがてその雨雲は、雷鳴と共に大雨を降らせ、島を雨と嵐で包み込んだ。

そして、島中を焼き払った炎は、その雨によってようやく鎮火したのだった。

第六話『雨島』（後書き）

web拍手による、感想や誤字報告など助かっています。ありがとうございます。

第七話『埋葬』

遅すぎた雨は、数時間にわたって島を水で包み込んだ。

島の炎は燃えうつる物が無くなり、空から降ってくる雨の力によって完全に鎮火した。

風に吹かれて漂うように空を飛んでいた鳳郎は、翼の向きを変えてゆっくりと巣があった場所に降りて行った。

先ほどは近づくことが難しいくらいだったのに、邪魔な炎が無くなったことにより、あっさりと降りることができた。

巣の場所に来ると、鳳子の骨が卵を抱きしめるような形で転がっていた。母親の最後の意地とでも言うのだろうか？ その骨の形を見た時、鳳郎にはこみあげてくるものを感じた。

骨の転がっている場所を見ると、卵がほぼ完全な形で転がっていた。

あの炎の中で、あの熱の中で、鳳子は最後まで卵を守りきったのだ。

鳳郎はそつとその卵をさするように翼を伸ばす……。
ぼろぼろ……そんな音が聞こえた気がした。

卵は鳳郎が少し触れると、何本ものひびが入り、粉々に崩れ去って風に攫さらわれていってしまった。

「……ああ……うわああああああ！」

空を飛びながら声がかかるまで泣いたというのに、今再び現実を目の当たりにして、鳳郎は大声で泣いた。その泣き声を聞く者は誰も居ない。

ひとしきり泣き続けた後、鳳郎は再び氣力を振り絞って飛び立つ

た。骨を集めるのである。

子供達が死んだ場所は大体分かつている。心配なのは木や灰によって、子供達の骨が隠れてしまっていること。

しかしそれは杞憂に終わった。子供達の骨は、鳳郎が探しに行くと、鳳郎が来てくれるのを待っていたのかのようにそこにあった。さすがに全身すべての骨があるという訳ではなかったが、どこから体の一部分の骨は全員見つけることができた。

鳳郎はそれらの骨を一本一本丁寧に集め、巣に運んで行った。そして、見つけた分の骨はすべてを巣に運びこむことができた。

巣には大きくばみがある。骨はそこに集めた。

鳳郎はその骨の上に、木の枝や草などを被せて骨を隠した。後は雨や風が吹けば、このくぼみに土が流れ込み、完全に骨を隠してくれる。他の動物が骨を持つていくのだけは避けたい。

骨を隠し終わると、そのすぐそばに石を積み始めた。

ある一定の高さまで来ると、少し間を置いて、隣にまた石を積み始める。

鳳郎が石を運ぶには、二本の足で掴んで運ぶしかない。島中を飛び回り、灰や燃えカスをかき分けながら石を探すのだから、当然鳳郎の体力は失われていく。

しかも、運ぶ石はどれもこれも尖っていて、鳳郎の足を傷つけた。石の塔を三つも作る頃には、鳳郎の足はボロボロになっていた。

しかし鳳郎はそれでも石を運び続けた。何かに取りつかれたように、石が血で濡れるようになってからも黙々と運び続ける。

相当な時間がたったころ、石の塔は九個出来上がった。これは墓だ。

とても立派と言えるような代物ではない。それでも、鳳郎が家族のために作ってやった墓だ。こういう感情が伴う建造物は、見えてく

れは 当然美しい方が良いことには違いないが 問題ではない。
思いが重要なのだ。

それを見た時、それを見たものが作った者の意思を確かに感じられたなら、それは他のどんな物にも引けを取らない。鳳郎が血を流しながら石を運び、涙をこらえて必死に積み上げたその墓が、どうして思いが込められていないなどと言えるだろうか？

これで、鳳子と子供達の埋葬は終わった。

最後の石を積み上げた瞬間、鳳郎はその場に崩れるように倒れ込んだ。そして今度は静かに泣いた。もう叫ぶ力など残っていない。

「ついに一羽きりになってしまった……」

誰に言うでもない。一言嘆くようにそう呟いた。すると、その呟きに答える者がいた。

「前と同じになっただけではありませんか」

いつだったか聞いた声。鳥は驚いてその声に向かって振り返った。「お前に直接会うのは二年ぶりですね、鳳郎。あの時にはまだ名前すら持つてなかったのを懐かしく思います」

女神の表情特徴は穏やかなものだった。周りのこれだけの惨状を目にしても、女神の感情はいささかも揺れていないようだった。

鳳郎はしばらく呆けていたが、どうやら目の前の存在は幻ではないらしいことに気付くと、黒い感情が湧きだしてきた。

「女神……お前、どの面下げて会いに来たんだア！」

鳳郎は吠えた。鳳郎がこの数時間忘れていた『怒る』という感情を、今思い出した。あれほど毎日熱心に祈っていた女神に対して、鳳郎は怒りのままに暴言を吐いた。しかし女神は、相変わらず涼しい顔をしている。

「何を怒っているのです？ 今まで悲しみに暮れていたはずではあ

りませんか」

「うるさいッ！ 女神、お前は言ったな？ 『幸せに暮らせる地があるなら生きたいか？』と、そう言ったな？ それに頷いて与えられたのがこの島だ！ ところがどうだ？ 今私はこれまでにないほどの不幸に見舞われている！ お前はこの悲劇が見たくてこの島に私を住まわせたのかッ！」

激しい鳳郎の怒りの声に対して、女神は首を振る。

「お前は勘違いをしていますね。二年前の言葉を良いように変えてしまっています。お前は『迫害にあうのは嫌だ。つつましく暮らしたい』と言ったのです。だから私は、『それが与えられる土地があるなら生きたいか？』と尋ねました。そしてお前は頷いた。その気持ちに嘘はなかったでしょう。お前はあの時それ以上を望まなかった。だから私もお前にこの島をやったのです」

鳳郎があまりに欲張るようなら、女神も助けるつもりなどなかった。鳳郎は些細な願いしか言わなかった。それは本当に追い詰められていたという証明でもある。だからこそ女神は、鳳郎にこの島を与えたのだ。

「しかしお前は凰子と出会ってしまった。『仲間』を得てしまったのです。だからお前は、最低限の生活では満足できず、幸せに暮らしたいと願ってしまった」

それにしても鳳郎の願いは変わらず小さなものだ。だから女神は、それで鳳郎を見捨てるようなことはしなかった。

「しかし私がお前に与えてやるのは、相変わらず『迫害を受けず、静かに暮らす』というものだけ。だからお前がそれ以上の幸福を得ていたのだとしたら、それはお前自身の力で手に入れなければなりません」

「迫害を受けない静かな暮らし……？ この惨状を見てどの口でそれが言えるんだッ！」

鳳郎は再び怒る。しかし女神は顔色を変えることはない。

「この島に他の鳥達がやってこなかったのはなぜです？　大きな嵐がやってこなかったのはなぜです？　それは私がお前を守っていてやったからですよ？　私はこの二年間、ずっとお前に加護を与えてやっていたのです」

確かにこの島に嵐がやってきたことはない。それが女神のおかげだというのなら、そうなんだろう。だから鳳郎は、女神に感謝することはあっても、不満を言うことなど間違っているのだ。

しかし、理屈が分かってはいても頭には来る。

「ならなぜ私の家族を守ってくれなかったんだ！　今まで守ってきていたくせに……」

「お前を守るということは、必然的にお前の家族達も守らなければなりません。しかしお前は島を離れた。その間に不幸にも人間たちがやってきて、島に火を付けた。それだけのことです」

あくまで淡々と女神は告げる。悪気はないのだろうが、鳳郎にはその口調が家族のことを下に見ているような気がしてならず、さらに怒りをかき立ててしまう。

「私が離れたからと言って、それまで続けていた島の加護をなくした？　それで弱いものが食い物にされるのを、指をくわえて見ていたというのか？　そんな話があるかッ！」

「加護は続けていましたよ？　私が加護を与えているのは島ではなくお前です。お前が居なくなれば島の加護が消えるのは当たり前でしょう？　お前の家族は一度として私に祈りをささげたことなどないではありませんか。信仰しないのを悪いとは言わない。しかし、神の愛というのは、その神を愛する者だけに与えられるものなのです。無差別に、無償の愛など与えられることはありません。ただ祈るだけの行為でも、神にとってみれば自分のために勤めていると見えて、それに見合う恵みを与える。お前の家族達は、どんなに追い詰められても私に助けを求めることはおるか、私を思い出すことすらしませんでしたよ？」

女神の存在を信じていたのは鳳郎だけだ。他の家族達は、むしろ不気味に見えてすらいいたのだから、加護が与えられるはずなどない。鳳郎はまだ不満はいくつもあつたが、反論する気力もなくなり、その場に俯いた。

そんな鳳郎に対して、女神は「それに……」と言って口を開いた。「お前だって、自分を守ってくれとは言いましたが、家族を守ってくれとは一言も言わなかったではありませんか」

「何を言つて……あれ？」

鳳郎は思い返した。今日この島を飛び立つときに女神に祈った時のことを……。

あの時確かに鳳郎は祈った。その時鳳郎は何を願った？ その時のことを思い返してみれば、『自分が無事に飛びきる』ことしか願っていなかったのではないか？ 家族を守ってくれなど一言も言わなかった気がする。では……。

「もしあの時に、私が『家族のことをよろしくお願いします』と願っていたら、家族のことを守ってくれたのか……？」

「過ぎ去った時間について、仮定の話などしても、意味がありません」

誤魔化した。鳳郎は瞬時にそう悟った。

女神は誤魔化したのだ。鳳郎のことを一瞬気遣つて、鳳郎が傷つかないように言葉を濁した。

つまり……あの時家族のことを願っていれば、女神は助けてくれたはずだったのだ……。

「ああああああッ！」

鳳郎は叫んだ。

「救えたのだ！ 守つてやれたのだ！ 私が自分のことだけでなく、家族のことと思つてやれていたなら、『家族のことをお願いします

！』とあの時一言言えたはずなのだ！　それが言えなかった……言わなかったのだ私は！　我が身かわゆさで家族のことを忘れたツ！
クソ……クソオオオオ！」

鳳郎は大粒の涙を零しながら悔しがった。

助けてやれたのだ。それは自分ではないが、自分が願うことによつて救えたはずだったのだ。

別にその方法でなくてもいい。思えば、他にももっと自分が気を付けていれば家族を救えたはずなのだ。

何羽か一緒に連れて行つていれば、もっと早めに帰つていれば、危険に対しては逃げるようによく言い聞かせていれば……。そもそも……出かけさえしなければ……。

そう思えば思うほど、後悔の念から涙が止まらない。自分の爪によつて体を引き裂き、殺してしまいたい衝動にかられる。

しかし耐える。まだ鳳郎にはしなければならぬことが残つているのだから……。

「女神……いや、女神様。どうか私の願いを聞いてくれませんか？」
「なんでしよう？」

鳳郎の意識は別の所に向き始めていた。女神もそれを察する。

「私は力が欲しいのです」

「何を成す力ですか？」

鳳郎は顔をあげた。その表情には先ほどとは別の怒りの感情が浮かんでいる。

「復讐です。私の家族を殺した人間達に復讐する力をください」

「……………」

女神は無表情に鳳郎を見下ろしている。鳳郎はそれには構わずに続けた。

「私は憎い。私達は静かにつつましく暮らしていました。皆心が綺麗な者達で、こんな理不尽な殺され方をするいわれなど全くありませんでした。人間達は残酷な方法で私達のことを引き裂いたのです。

私も人間達に同じことをしてやらなければ気がすまない……家族達も同じ気持ちのはずです！」

鳳郎の怒りは、ようやく向かうべき所に向かった。女神をいくら責めてもそれは筋違いだ。

家族を殺したのは女神ではなく、人間達だ。

二年間かけて築き上げてきた幸せな生活。それを一瞬のうちに壊されてしまったのだから、怒りの感情が湧かないはずがない。

感情をあらわにして力を求める鳳郎のことを、女神はしばらく何も言わずに見つめていた。

そして女神は、少し責めるような口調で話し始めた。

「お前に力を与えることは容易です。しかし、お前の力を求める理由がいけません。もし、お前が今考えている目的のために力を求め、それを受け取ったとしたなら、お前は罰を受けなければなりません」

鳳郎は一瞬呆然としたが、すぐに気を取り戻して女神に問うた。

「理由がいけない？ 人間達は島に火を付けて私達のことを虐殺したんだぞッ！ 本来なら、あなたのような高次元の存在が裁きを加えなければならぬはずだッ！ それに対して復讐する力を求めることの何がいけないッ！？」

「人間達には罪がありません」

冷たい風が吹いた。その風は鳳郎の羽を揺らし、女神の髪を揺らした。

その風は鳳郎の体に吹き付け、体の芯まで冷やしたように感じられた。

「なに……何を言っているんだ……？」

「人間達には罪がないと言っているのです」

「え……いや、だって……」

鳳郎は周りの惨状を再び見渡す。何もない……。何もかもが燃え尽きてしまっている。もしあるとしたら、瓦礫と人間達の罪の爪後だけだ。

「お前達の視点から見れば、人間達は悪に見えるでしょう。しかし、人間の視点から見れば、人間達には罪がないのです」

「……………」

鳳郎は反論もできず、ただただ女神を見つめる。

「人間達からしてみれば、『立ち寄った島で狩りをして、一羽の鳥を捕まえて料理をした。しかし、その鳥の肉は食べられるものではなかった。捨ててしまった。すると、鳥達に襲われたため、身を守るために応戦。しかし、鳥達はさらに激しく襲ってきたので、人間は誰も住んでいないこの島に火を付けてさらに自分達の身を守った』だけです」

「だ……け……？」

何もかもが死んでしまったんだぞ？ 鳳郎達だけじゃない。虫や他の小動物達。植物たちだって生きていた。鳳郎達だって狩りはするが、それは食べるためであり、生きるためだ。こんな無意味な虐殺行為などしない。

そんなことを考えている鳳郎に対して、女神は淡々と告げて行く。『この行為に対して、やり過ぎだと非難する者は居るでしょうが、そのことを指して罰を与えようと言いだすものは少ないでしょう。この島を襲った人間達の国には、『動物を殺害する行為』や『自然破壊』に対して罰を与える法律がありません。それにこの島は何処の国にも属していない。発見すらされていない孤立した島。侵略行為でもないのです。つまり、人間達の中で怒りを感じる者がいない。誰も困らない。すべての人間達に対して罪がない」

何なんだ？ さっきから目の前の女神は何を言っているのだ？

「私達に……私達に対して罪がありますッ！」

「確かにあるでしょうね。ですがそうすると、世界中すべての生きとし生けるものに罪があることになり、すべての存在が地獄に落ちなければなりません。故に神の審判というのは、その生き物の立場に立って審理しなければならぬのです」

「なら私達の立場に立つて私の行為を見て下さいッ！ 私は家族を殺された！ それに対して復讐することの何処に罪があるというのです！」

「自分より強い存在に家族を殺された鳥が、復讐しようなどと考えますか？ 鳥の立場から見れば、お前のすべき正当な行為は、自分に命あることを感謝し、子孫を残すために次の相手を探すことです」

神の理論とは、これほど理不尽なものなのか？

「なら……復讐することが許されるのは人間達だけということになるのですか？」

「お前の力だけで復讐するというなら、それは認められるでしょう。しかしお前は私に力を求めている。人間達に復讐することが出来るだけの強大な力を……。制度無き復讐は秩序を乱します。人間達は秩序を乱さないよう、法律を作り、司法機関を作り、厳正な審理と適当な罰則を……」

「もういいッ！」

鳳郎は女神の言葉を遮って叫んだ。

「もういい！ もうたくさんだ！ ルールや罰など知ったことか！ とにかく私は家族の仇を取らねば気が済まない！ 力をくださいッ！」

元々女神と論争をしても何の意味も無かった。この悲しみや怒りを理解できるものが、鳳郎以外に居るものか。鳳郎には一刻も早く力を手に入れて、人間達に罰を与える義務があるのだ。

女神は鳳郎の意思が固まっていることを理解し、それ以上余計なことを言おうとはしなかった。

「では罰として、お前から『死』を奪います」

「……『死』を奪う？ どういう意味です？」

「文字どおりです。お前から『死』が無くなり。お前は死ぬことが

できなくなるのです」

不老不死になるということか。鳳郎はそう理解した。

「しかしそれは罰というよりも……」

「この罰の意味が分からないのですか？ 自ら死のうとしたお前が……？」

鳳郎はその言葉にハツとした。

確かに、自分以上にこの罰の重さを分かるものは居ないだろう。

二年前、どうしようもなく追い詰められた時に、鳳郎がしようとしたのが『死への逃避』だった。

今だって、これ以上ないくらいの悲しみに襲われて胸が張り裂けそうだった。本当なら、家族達の後を追って、再び自殺したいくらいなのだ。

『死』を奪われるということは、その最後の逃げ道を自ら閉ざすということだ。その重大さは、鳳郎が一番よく分かっている。

「確認します。力を求めますか？」

「……はい。『死』を奪われてでも、人間達に報復する義務があります」

女神は、鳳郎の意思を確認すると、手をかざした。

「ではお前に力を与えます。お前の家族の命を奪った炎の力……それとも、何ものをも寄せ付けず、すべてを焼き払う強力な炎……『神の炎』をお前に与えます」

第八話『沈没』

人間達の船は、あてもなく海を漂っていた。船の中央には、どくろのマークの旗が掲げられている。海賊船である。

海賊たちは、先ほど立ち寄った島の話をしていた。

「お頭、^{かしら}今回も偽物でしたね？」

一人がゴミ同然になり果てた宝の地図をひらひらとさせながら、海賊の船長に向かって話しかける。

船長は酒を煽りながらそれに答えた。

「たく、あの情報屋が持つてくる地図はいつも外ればかりだ。今回は島があつたからまだましだが、今まではその島すらなかったことが何度もあつたからな」

「何言つてんすか。下手に島があつたせいで、こんなくたびれちまつたんじゃないですか。これならむしろ何も無かつた方が、手間が省けて楽ですよ」

確かに。周りに集まっていた船員達がそう頷いて爆笑した。

「今回は特別重労働だったしな。島を全部焼き払う必要なんてあつたのか？」

誰かがそう言うと、船長が不機嫌そうに吐き捨てる。

「けッ！ だったらお前ら、あの糞鳥に舐められたままでよかったのか？ 何人か谷に落ちて死んだんだぞ？ そのまま帰つたんじゃないか？ 海賊の名前に傷がつくぜッ！」

鳥ごときに熱くなるのも情けないけどな。無駄に疲れさせられた船員達は、心の中でそう不満を呟きながら苦笑いをする。

「珍しい鳥でしたよね。長いこと世界中を渡ってますが、あんな鳥見たことありませんでしたよ」

「ひよつとしたら、あの鳥がお宝だったりしてな」

「だったら焼き払って正解だ。他の誰かが手に入れて、大儲けする

のを邪魔できたんだからな」

船長はそう毒づきながら酒を飲んだ。

これは相当糞をかけられたのに怒ってるな。船員達は目を合わせながら頷き合い、しばらく愚痴を聞かなくてはならないだろうことを察してため息を吐く。

「お頭ツ！」

突然、柱の上で見張りをしていた船員が叫んだ。

「どうしたツ？ 別の海賊船でも見つけたかア？」

「いいえ、何か光るものがこっちに近づいてきているんです！」

「光るもの……」

船長は、見張りに言われた方向に目を向けた。すると、確かに何か小さい光るものがこちらに飛んできているのが見えた。他の船員達も、「なんだ？ なんだ？」という風に集まってくる。

「おい、あれって鳥じゃないか？」

特別目のいい船員がそう言うのと、あちこちから「確かに鳥に見える」と言おう声が上がりは始める。

「んー、さつき島で見たのと同じ鳥だな。しかも……燃えてる？」

船員が望遠鏡を持ってきて鳥を見ると、先ほど見た鳥と同じ姿が見えた。しかもその鳥は炎をまとい、まっすぐとこの船に向かって飛んできている。

「生き残りかあ？ 全部弓で射殺したと思ったんだがな」

「昼寝でもしてたんだろ。それで、体に火が付いて大慌て。訳も分からず飛んできたっていう訳だ」

そいつはいい。海賊たちはまた爆笑し、その鳥の方向を見つめた。しかし、なかなかその鳥は海に落ちる気配がない。火が付いているのだから、すぐに死んでしまってもおかしくないというのに。火が付いているように見えるのは錯覚か？

とうとう鳥は、目視できる所まで近づいてきた。

「ふーん、どうやら仲間達の後を追いたいと見えるな。弓矢を持ってこい！ 俺が射殺す」

海賊のうちの一人がそう言うと、仲間が弓を持って来た。弓を受け取ると、しっかりと狙って矢を放つ。それはまっすぐと鳥に向かって飛んで行った。

「……よし！ 当たったぞ！」

矢を放った海賊はそう叫んだ。

確かに矢は、鳥に命中したように見えた。

しかし鳥は海に落ちることはなく、平然と飛んでいる。

鳥は海賊たちを良く見ようとするかのように、船の周りをゆっくりと飛び始めた。

「下手糞！ 俺が手本を見せてやるぜ！」

「俺も俺も！」

他の海賊たちが次々と弓を持ってきて、鳥に向かって矢を放ち始めた。

雨のように降り注ぐ矢。その何本かは、気のせいではなく確実に鳥に命中した。

しかし、鳥は落ちる気配がまるでない。翼を大きくはためかせ、船から離れたり近づいたりを繰り返して、自分がまるで無傷であることをアピールしている。

「……おい、なんか変じゃないか？」

「矢は当たってるはずだよな……？」

海賊たちも疑問を口にしながら始めた。

「もしかして……幽霊か……？」

誰かがそう言った。

「まさか……」

「でもあれを見るよ！ あの鳥の周りにあるのは完全に炎だぞ？ それなのにどうしてあの鳥は焼け死なないんだよ！」

海賊たちの中に動揺が走り始めた。

「大砲だ……大砲を使つて！」

「馬鹿ッ！ たかが鳥のために火薬を無駄にできるかッ！」

「でもよ！ 弓矢じゃ殺せないんだぞ！」

「……お頭。良いですか？」

船長は特に慌てることもなく、落ち着いたまま酒を飲んでいた。

船長は幽霊の類を信じてないし、そんなことで騒ぐ者も嫌いだ。しかし海賊たちの中で不安が確実に広がっている。それは少し無視できない。

「……仕方ねえな。一発だけだぞ？」

船長は渋々了承した。

船長の許可がでると、海賊たちは急いで大砲を用意して、照準を鳥に合わせる。

巨大な音と共に弾が発射され、その弾は鳥をとらえた。

大砲の弾は鳥に命中すると爆発し、鳥は黒い煙に包まれた。

「やったぜッ！ ヒュー！ ……あれ？」

煙はすぐに晴れた。そして無傷の鳥の姿が現れた。

「なんだよ……何なんだよあれは！」

「弾が外れたんじゃないのか？」

「爆発したんだぞ！ 当たってないはずがねえッ！」

今度こそ海賊たちの中に動揺が走り、船の中に混乱が広がった。

「帆をはれ！ 追い風を受けて一気に振りきるんだ！」

誰かが声をあげると、海賊たちは一斉に動き始めた。

「馬鹿野郎ども！ 俺の許可なしに動くんじゃないやねえ！」

船長が痺れを切らして怒鳴りつけた。確かに船長の許可を取らずに船を動かそうとしたのはまずかった。

「しかしお頭……あの鳥が……」

「鳥なんかにビビってんじゃないやねえよ。鳥ならあの島でさんざん殺し

ただろうが」

船長は立ち上がり、剣を取りだして鳥を見上げた。もう鳥は船の真上まで来ており、海賊たちのことを見下ろしていた。

「降りて来い糞鳥！ 俺が殺してやるぜ！」

「……………」

鳥は言葉を理解したかのように降りてきた。そして船長の前に降り立ち、威嚇するように翼を広げる。

「……………でけえ」

その鳥は、鳥で見た鳥の中では一番大きかった。しかも、炎に見えた赤い帯は、錯覚などではなく本物の炎だった。鳥の体が触れている部分から、船に火が移り始めている。

「お、お頭ッ！」

「ビビるなって言っただろッ！ バケツに水を入れて持ってこい！ 俺がこの鳥を殺したらすぐに火を消せッ！」

船長はそう指示を出して鳥に近づく。鳥は逃げずに船長を睨んだ。また。

「仲間の元に送ってもらいたくて、わざわざ俺の所に来たのか？ たく、面倒くせえ野郎だな。宝を探すのは邪魔するし、食ってやるうにも不味くて臭くて食えたもんじゃねえ。とことんむかつく糞鳥だぜエ」

その言葉に、鳥はさらに強く睨んだように見えた。

「いくら粋がったところでな、鳥が人間様に勝つなんざあり得ねえんだよ！ くたばりやがれ！」

船長はそう言っただ剣を振り下ろした。その剣は全く抵抗を受けずに振り下ろされた。

（…………手ごたえがねえ）

剣を振り下ろす時、あまりにも抵抗がなさすぎた。何も切った感覚が無かったのだ。おまけに、肩から先の感覚も急になくなったような気が…………。

「お頭！ 腕が！」

「何？……う、うわああああ！」

部下に言われて腕を見ると、そこにはなにもなくなっていた。甲板に目を向けると、何かが焼けた燃えカスのようなものが転がっていた。まさか、これが腕だというのか？

「いてえ！ いてえ！ 何なんだよ糞がア……あ？」

船長が方の傷口に手を当てて苦しがつていると、突然そこから火が噴き出した。

「うわああああ！ 燃える！ は、早く消しやがれッ！」

あまりのことに呆然としていた海賊たちは、船長の声で我に帰って、一斉に水をかけた。しかし、水をかけても船長の体の炎はまるで消える気配がない。

「うぎゃああああ！ 助けてくれ！ 焼ける焼ける焼ける！ 体が焼けちまう！」

炎は船長の体をじつくりと焼いて行つた。体中の皮が焼け剥げ、ジュージューと嫌な音をあげながら崩れ落ち、あたりには人の肉が焼ける嫌な臭いが漂った。

「た……すけ……」

消え入るような声で船長の口がそう声を漏らしたかと思つたら、船長は焼け死んでしまった。

「ひ……ひいいいい！」

誰かが悲鳴を上げて逃げ出した。するとその者の体から炎が噴き出し、炎に包まれてしまった。

「な、なんだよこれはああ！ 水、水を持ってきてくれエ！」

しかしさつき水をかけても消えなかったのは全員見ている。だから今度は誰も水をかけようとしなない。

水をかけてもらえないと理解したその海賊は、海の中に飛び込んだ。他の海賊がそれを見下ろすと、海の中に入っても炎が消えないのが見えた。

「と、鳥を殺せえ！」

その声に、海賊たちは武器を手を取った。

「！」

鳥はそんな海賊たちを見て大きな鳴き声をあげた。言葉として意味を持たなかったとしても、その声からは大きな怒りが感じられた。

次々に鳥に向かって振り下ろされる刃物。それらは、鳥がまとった炎に触れると、たちまち溶けてしまった。そして、その武器を振り下ろした者達の体に炎が灯り、嫌な臭いと共に焼け始めるのだ。

「海に飛び込め！　なんとか陸まで泳ぐんだ！」

誰かがそう叫んで海に飛び込んだ。しかし……。

「ぎゃああああ！　なんだ！　海の中が熱いッ！」

海の中は燃えるように熱かった。何人か体が燃えたものが飛び込んだが、そんな程度で海が熱くなるはずがない。

しかし海は確かに巨大な熱を放っていた。飛び込んだできた者を、三六〇度すべての方向から熱で包み込み、皮を剥ぎ取る。そして体中の肉が崩れ落ち、海の中に崩れていく……。

「駄目だ……海の中に飛び込んでも助からねえ……。ひい！」

絶望の呟きをする物に鳥が近づいてくる。

「た、助けてくれッ！　お前の仲間を殺しちまったのは謝る！　俺だつて殺したくて殺したんじゃないやねーんだ！　お頭に命令されたから！」

言葉が通じるかも分からない鳥に向かって、海賊が命乞いをする。すると、一瞬鳥は動きを止めた。

「み、見逃してくれるのか……？」

海賊はそう解釈して頭をあげる。

「あ、ありがてえ！　今度からは……あ、あがあああああ！」

鳥に向かって言葉を吐こうとした海賊の口から、仲間達を焼き払った炎が溢れだした。それは海賊の顔を焼いて、やがて全身を包み込んだ。

『殺したくなかった訳でもないんだろ？ 俺達のことを下に見ていたくせに今更命乞いなどするなッ！』

海賊はそんな声を聞いた気がした。

* * *

そんな地獄絵図とも言えるような海賊船を、女神は静かに見下ろしていた。

「鳳郎……、お前は復讐せずにはいられたのですね……。そんなことをして家族が生き返りましたか？ 幸せは取り戻せましたか？」

パチパチと木が燃える音に、海賊たちの悲鳴が混じる。しかし、女神の問いに答える声はない。

「……そうですね。お前はきつとこう答えるでしょう。『家族を取り返したくて復讐をしたんじゃない』と……。それでは鳳郎。お前の悲しみや怒りはこれで癒えましたか？ もう十分ですか？」

女神がそう問いかけても、返事はまた木の燃える音や悲鳴ばかり……。

「お前のちつぽけな復讐心がこれで満たされたというなら、なるほどお前のした行為は全く無意味ではなかったと言えるでしょう。しかしお前の憎悪は、ここに居る人間達だけでは足りないでしょう。お前はこの程度では満足しない」

鳳郎は答えない。すでに女神の存在などに意識が向いていない。

鳳郎の頭にあるのは、目の前の人間達へ復讐すること。そして、その復讐心はここに居る以外の人間達にも向かうだろう。

「言葉にしがたい想いがします。お前達は、同胞の中で間違いを犯した者が出たら、その者だけが狂っているのだと言って切り捨て、自分達のことを守ります。しかし、自分達とは関係ない集団のものが間違いを犯せば、その集団すべてが狂っているのだと敵視してし

まう」

今の鳳郎に、仇討すべき人間と、仇討すべきでない人間の区別などつくはすがない。

仕方がないだろう？ 鳳郎は鳥なのだし、今まで人間達とはほとんど関わらずに生きてきたのだ。目の前の人間達が犯した罪は、人間達すべてが犯した罪と同義。

人間達の間でだって、人種や国、宗教の違いからいがみ合っている例などいくらでもある。たった一発の銃弾で戦争が起きることだってあるのだ。

ならば、人間に家族を殺された鳥が、すべての人間達を恨むなど言えるはずもない。

「視野が狭いとか、思いやりの心が足りないと言ってしまえばそこまです。しかし悲しいことに、あなた達はそのようにできている」

*

*

*

「……………」

「や、やめてくれ…………許して…………」

最後まで生き残った海賊が、身につけている物を投げ出し、甲板に跪いて命乞いをする。

鳥を殺そうと戦った者は死んだ。逃げようと思って海に飛び込んだ者は死んだ。

ならばあとは、鳥に命乞いをする他ない。鳥に許してもらうほかは、生き残る方法はないのだ。しかし…………。

「うわ…………わあああああああ……」

男が流した涙が、炎の雫に変わり、男の体を包み込んだ。けして消すことのできない炎。後は、苦しみながら焼け死ぬのみ…………。

*

*

*

「もはやお前を止めることはできません。お前自身が止まらない限り」

女神は最後にそう呟き、消えてしまった。

第八話『沈没』（後書き）

第2部終了。次回から3部です。

この3部が長引かなければ、サクッと終われるはず……。

次回以降は、更新が遅くなるかもしれません。

ですが、どんなに遅くとも今年中には完結すると思います。

第九話『小舟』

鳳郎は女神から得た力で、人間達に残虐な方法で復讐した。しかし、鳳郎の深い悲しみと怒りは、それでおさまることはなかった。

家族を殺した人間達に復讐しても、家族は戻ってこない。人間達を殺したからと言って、家族が殺された事実が無くなる訳ではないのである。

その悲しいまでの現実が、鳳郎に重くのしかかり、鳳郎の心を苛み続けたのだ。

もはや鳳郎に、人間達の区別はつかなかった。自分の家族が殺された現場を見たわけではない。対象が人間の形をしてさえいれば、それはすべて復讐の対象に見えた。

あの日、鳳郎が炎の力を得た日を境に、女神の加護はなくなってしまったようだった。それまで一度も通じかねることすらなかった人間達の船が、島の近くに現れるようになった。

とはいっても、人間達の船が、鳳郎の住む島に用事があるはずもない。何もしなければ、その船は島の横を通り過ぎただろう。

しかし、鳳郎にはその船をただ見送ることなどできなかった。

人間の作った船が目に入るたび、鳳郎の胸に怒りの炎が灯り、その船を焼こうとして燃え上がるのだ。

鳳郎はその炎を鎮めることはせずに、まっすぐと船に飛んで行って、怒りのままにその船を焼いた。当然、その船に乗っている人間達も焼き殺した。

そんなことを続けていると、鳳郎の島には武器や大砲を乗せた船がやってくるようになった。人間達が何かに気付いたのである。

鳳郎は、そんな船にも恐れずに向かって行った。他の船とは違い、

無抵抗に焼き滅ぼすことはできなかったが、『神の炎』と『不老不死』の力を持つ鳳郎は、武装した人間達の船を炎の力で圧倒し、海の藻屑にした。

小競り合いがしばらく続いていると、人間達は船団を組んで鳳郎の島にやってくるようになった。

鳳郎の存在は、完全に人間達に知られるようになったらしい。数えきれない人間達を殺し続ける化物……。

どこかの国……いや、周辺のいくつかの国の王が、鳳郎の存在を危険視し、討伐のために船団を向かわせてきているのだろう。

もしも討伐できれば、国民からの支持も高まるし、化け物を退治した軍を持っていると言って、国の名も上がる。そんな思惑から、化け物退治を指示し、大船団を組んで鳳郎の住む島に押し寄せてきたのだ。

鳳郎は、そんな国の思惑など知らなかった。ただ、自分を殺すために人間達が向かってきているのだけは分かった。反撃し続ける理由としては、それだけで十分だった。

人間達は次々と船団を送り続けたが、神の力を持った鳳郎の前に敗れてしまった。

いくら攻撃しても手ごたえがなく、圧倒的な力を持って反撃される。戦うことには慣れているはずの兵士達は、目の前の赤い鳥は、自分達の理解を越えた存在なのだと思い知らされ、戦意を喪失して敗走して行った。

大きな戦争規模の死者が出るほど、鳳郎と人間達の争いは続いたが、やがて人間達の方が諦めた。

国王は国民達に対して、一定の海域　鳳郎の島の近く　に入ることを禁じる命令を出した。事実上の、人間達の敗北宣言だと言える。

これにより人間達が島の周りに近づくことはほとんどなくなった。

ところで、女神の加護が無くなって変わったことは、人間達が訪れるようになっただけではない。

激しい嵐が島を襲うようになり、日照りによって島の植物が腐り果て、病気が流行って、魚や動物が死に絶えるようなことも起きるようになった。

鳳郎は、嵐が来れば翼を大きく広げて墓を守り、日照りや病気によって食べる物が無くなれば、水だけを飲んで飢えに耐えた。

はじめの頃は、人間達への怒りの感情から、そんなものに対して苦しみを感じることはなかった。

しかし、島に人間達が近づくことが減ってから、厳しい環境の中で考える時間が増え、鳳郎の怒りや悲しみは、次第に小さくなっていった。

そんな時、島の近くを人間達の船が通りかかった。

国がこの近くの海域に入ることを禁じたと言っても、風や潮の流れによつてたどり着いてしまうことがあるし、遙か遠くの国からこの近くまで航海に来る船もある。

だから、ごくたまに島の近くを人間達の船が通りかかることがあるのだ。

そんな時鳳郎は、ほとんど義務心からその船に向かって行き、炎を使って海に沈めた。

悲鳴をあげる人間達、わずかな抵抗を見せる人間達、命乞いをする人間達……。

昔はそれに対して、優越感を覚えていた鳳郎だったが、この頃になるとそれを見るのが苦痛に感じるようになっていた。

ある時、一艘の船が島の近くを通りかかった。鳳郎は翼を広げて、その船に向かって行こうとしたが、どうにも飛び立つ気分にはなれず、そのまま見送ることにした。

その船が水平線の向こうに消えるのを見た時、鳳郎はなぜか安堵してしまった。

その後また船は通りかかったが、鳳郎はまたその船を見送ってしまった。

「一艘見逃せば二艘見逃しても同じことだ……」

鳳郎はそう呟いたが、その後三艘、四艘と船が通りかかって、前のように襲いかかることはしなかった。

ある時、島を巨大な嵐が襲った。

嵐が島に来ることはよくあることだったが、その時はおまけに人間も島にやってきた。どうやら、嵐のせいで船が難破し、小舟に乗って流れついてしまったらしい。

島に上陸されたのでは無視をする訳にもいかない。鳳郎は、島の影に隠れて人間に話しかけることにした。この頃には、鳳郎は人間の言葉を覚え、自在に操ることができるようになっていた。

「その人間、聞いているか？」

「な、私に話しかけるのは誰ですか？」

急に聞こえてきた声に怯え、人間は周りを見渡した。声は、人ならざる者の気配がしたからだ。

「私はこの島に住む鳥だ。お前はこの島に何をしにやってきたのだ？」

「鳥……。ま、まさか！『孤島に住む赤い凶鳥』とは貴方のことですか！？」

人間は取り乱し、より一層怯え始めた。

「凶鳥……。？それは、私のことなのか……？」

鳳郎はそう呟き、しばし考え込んだが、確かにそう言われても仕方がないだろうと思った。

自分は一体どれだけの船を海に沈めたことだろう？ 一体どれだけの人間を殺したことだろう？ 初めは復讐のためだったが、次第にそれはただの暴挙になり果てて……。

いや、そもそも最初の一回。海賊たちを焼き殺した以外は、人間達に罪などなかったではないか。それなのに、自分は殺戮を続けて……。

「ゆ、許してください！ 命ばかりはどうかつ！ 私は船から振り落とされ、共に投げ出された小舟にしがみついてこの島に流されてきただけでございます！ 決して、あなたに危害を加えることはしないと誓います！ ですから、どうか……どうかッ！」

人間は涙をぼろぼろとこぼし、額を砂浜にこすりつけ、顔は鼻水と砂でぐちゃぐちゃになり、何ともみじめな姿だった。

その姿は、鳳郎の心の中にあつた凶悪な人間の姿ではなく、何とも情けなく、か弱い存在に見えたのだった。

（人間とは……こんなに弱々しい生き物だったのか……）

「……島の奥には入るな。嵐がやみ、日が昇ったら島を去れ」

鳳郎はそう言い放ち、島の奥へ帰って行った。

人間はそのまま朝になるまでその場を動かず、日が昇ると同時に小舟に乗って海に向かって漕ぎだして行った。

数日後、数十年ぶりに人間達の船団が島に押し寄せてきた。

どうやら、この間逃げ帰った人間の話を聞き、孤島に住む赤い凶鳥の力が弱まったのだと人間達は思い込み、再び討伐のために軍を向かわせてきたらしい。

鳳郎は、そんな人間達に呆れた。しかし、呆れただけで、特に怒りの感情は湧いては来なかった。

力が弱まったと思われる訳にもいかなかったから、

鳳郎は船団に対しては前と同じように反撃した。
何度か反撃すると、人間達の攻撃は止んだ。

しかし、攻撃は来なくなつたが、人間達の船は島の周りを普通に通り過ぎるようになった。

孤島に住む赤い凶鳥は、自分に襲いかかる船に対しては反撃するが、ただ通り過ぎるだけの船には手を出さないと思つたかららしい。実際、その通りだつた。鳳郎は通り過ぎるだけの船は見逃すようになった。何度か島に人間が流れ着くこともあつたが、島の奥に入る前に警告し、すぐに島の外に逃げ出す人間に対しては攻撃するとはなかつた。

鳳郎は、物思いにふけるようになっていた。

自分はなぜ生きているのだらう？　そもそも、自分は生きているのだらうか？　機械的に行動するだけで、生きているとはとても言えないのではないか？

『このままでは、あまりに悔しいではありませんか』

「鳳子……」

鳳郎はあの場所に来ていた。鳳子が死んだあの場所に……。

『このまま死んだのでは、不幸になるために生まれてきたようではありませんか！　子供達はどのように生まれてきたのです？　私達はどのように生まれてきたのです？　幸せに生きるためではないのですか？　嫌われし鳥として生まれ、嫌われし鳥として死ぬ。私はそれが非常に悔しい……だからあなたに託すのです。私達だって幸せに生きる権利があるのだということを証明して欲しいのです！』

鳳子はある日そう言った。しかし鳳郎は、復讐を除いて具体的に何かをした訳ではない。ただ生きているだけ……。

「鳳子……私はこれからどうすればいいのだらうか？」

途方もない時間が過ぎてから、今更のように鳳郎はそのことを悩むようになっていた。しかし、結局答えは出せないまま時間は過ぎ

る……。

気が付けば、百年近い時間が過ぎていた。
そんな時、嵐でもないのに、人間を乗せた小舟が一艘、島に向かってきていた。

第九話『小舟』（後書き）

ダイジェスト回です。

ほぼ説明だけの100年間。

第十話『会話』

「……あれは何だ？」

鳳郎が海の彼方を眺めていると、一艘の船がこちらに向かってくるのが見えた。

海に浮かぶ物の正体が船だと分かった。「ああ、いつもの漂流船か……」と一瞬気を緩めたが、良く考えると不審な点があった。

今日昨日と、海は全く荒れずに穏やかだった。それなのに船が難破することなどあり得ない。嵐にあつて小舟ごと海に放り出される状況になるはずがないのだ。

ならばあの小舟に乗っている人間は、わざわざ大きな船から小舟に乗り換えてここに向かつてきていることになる。しかし、周りを見渡しても他の船は見つからない。かなり遠くに船を止めているということか？

なぜそんなことをする必要がある……？ 警戒しているということか？ たった一羽で幾万の人間を殺した赤い凶鳥を？

「ならば……敵か……？」

鳳郎は緊張して小舟をさらに注意深く見つめた。鳥の視力は人間の数倍はある。あちらからはここが見えなくても、こちらからは海の上に浮かぶ小舟が良く見える。

「……………」

鳳郎は船を注意深く見てみると、そこには予想に反したものが乗っていた。

人間は乗っている。ただ、その人間は明らかに老人だった。

顔を見ると、どうやら男であるようだった。見るからに弱々しいという感じではないが、特別力強いとも思えなかった。せいぜい、歳の割には元気なお年寄りといった程度だ。

状況が異様だったのは、乗っていたのが老人だったというだけではない。その老人が着ている服が真っ黒で、所々に宝石が散りばめられており、しかも体中を覆うような服を着ていたのだ。

今は夏だ。そんな恰好をすれば辛いはず。なのにわざわざそんな恰好をしているのが、鳳郎には理解できなかった。

さらに不思議だったのは、船だ。小舟には老人一人しか乗っていない。そしてその老人は、船を漕いでいないのだ。それにも関わらず、船はまっすぐと島に向かってきている。

「面妖な……」

鳳郎はそう呟きながら、どうしたものかと頭を抱えた。百年この島で生きていて、こんなことは一度もなかった。どう対処するべきか即決できない……。

鳳郎が悩んでいるうちに、小舟は島に上陸しようとしていた。島の内部にまで入られるのはまずい。とりあえずあの船が上陸した海岸まで行き、相手の出方を待って対応しようと考え、鳳郎は木や崖に隠れるように飛び立った。

「相手の出方を待ってか……少し前なら考えられんだろうな」

以前までなら、怪しい怪しくない関係なく焼き払っていた。悩む必要などない。自分には女神から与えられた最強の炎の力があるのだから。

鳳郎は、そんな自分がおかしくなって、少し笑うのだった。

*

*

*

鳳郎が、海岸が良く見える木の影まで来ると、すでに老人は上陸していた。

いつもならここで、島の中に入るなと警告する所なのだが、今日

は相手の出方を見る。何もせず引き返せばよし、何か妙なことをするようなら……力を持って対応せざるを得なくなる。

しかし、老人はどちらもしなかった。というより、本当に何もしなかった。

老人は島に上陸した後、じつと森の奥を見つめ、静かに立っていた。

ただただ立ち尽くしている老人に対して、鳳郎はどう対応するべきか悩み、追いつくことも、攻撃することもできなかった。

膠着状態が続く。その場には風が木の葉を揺らす音と波のざわめく音以外何も聞こえない。

そのままの状態で、一時間が過ぎた。

老人は相変わらず立ち尽くしたままだったが、二度三度周りを見渡した後、目をつぶって俯き、一言一言呟いた。

すると目を開き、意を決したように叫んだ。

「この島に住む強力な力を持った赤き鳥よ！ 聞いているか？」

鳳郎はびっくりとして耳を澄ます。やはりこの老人は自分に会いに来たのだ。そして見張られていることを知っている。油断してはならない……。

「私は神林王国^{かみはやし}からやってきた呪術師で、相崎忠政^{あいさきただみ}というツ！ どうか姿を現してはくれないか？」

鳳郎は一瞬驚いた。神林王国と言えば、鳳郎が生まれた島にある国だ。四国のうち、最も資源と食料が少ない小国だった。しかし、人材だけは豊富で、大陸まで名前を轟かすほどの人間も居た。

そんな国の呪術師が、一体何の用があるというのだろうか？

「何用か？」

鳳郎は目の前の人間が自分の故郷の人間であり、老人一人では何

もできないだろうと思い、呼びかけに答えることにした。

鳳郎の答える声が聞こえると、相崎と名乗った老人はその場にひざまずき、敵意がないことを示した。

「先ほども言いましたが、私は神林王国の呪術師です。たくさんの弟子を抱え、四国の中でも五本の指に入るほどの力を持っていると自負しております」

「お前が何者かなど聞いていない。何をしに来たのかと聞いている。用がなければ早々に立ち去れ！　島の奥に入りたいというのなら、力を持つてお前を排除するぞ」

鳳郎は語気を強め、やや脅し気味に相崎にそう告げた。まだ警戒を解く訳にはいかない。相崎の言っていることが本当かは知らないが、実力を持った人間なら油断ならない。

「あなたの話は、幼いころからずっと聞かされていました。大海の途中にポツンと浮かぶ孤島に住む、残酷非情な赤い鳥。まだ若く、好奇心が旺盛だった頃の私は、いつか自分の手で退治して、手柄をあげたいと思っておりました」

「ほう……ずいぶんと正直だな……」

鳳郎はいつでも炎を生み出せる体勢をとった。

見たところ、相崎はずいぶんと歳をとっている。このまま老衰で死ぬのでは満足できず、どうせなら悪名高い赤い凶鳥と一騎打ちして殺されたいとも思っただのかもしれない。

どれほど力を持っているとは言っても、人間では寿命にも力にも限界がある。まさか鳳郎が劣ることはないだろう。ならば、一瞬のうちに勝負を決めず、少し演武をしてから殺してやってもいい。

鳳郎はそんなことを考えて相崎の話に耳を傾ける。

「しかし、ある時から孤島に住む赤い鳥のことを、色々と思つようになりました」

「何？」

「赤い鳥はなぜ誰も訪れない孤島に居るのだろう？ それだけの力を持ちながら、なぜ世に羽ばたこうとしないのだろう？ なぜ人間達を襲うのだろう？ 感情はあるのだろうか？ 知性は？ 何か島にいないければならない使命でもあるのか？」

鳳郎は首を傾げた。自分が思っていたのとは違う雰囲気になってきたからだ。

赤い鳥のことを想うようになったと？ この老人が何処に話を持って行こうとしているのか分からない。

「私が幼い頃は、近づく者すべてを焼き払う残酷な鳥というのが、あなたに対する世間の一般的な認識でした。しかし、数十年前から自分に危害を加えない者に対しては、島に一時的に上陸する者に対しても攻撃をしない鳥という認識に変わって行きました。ある男が、島から生還したという話が広まってからです」

恐らくその男は、嵐の夜に小舟に乗って流されてきた男だろう。あの後人間達から再び攻撃があつたくらいだから、それなりの衝撃を与えた出来事だったのかもしれない。

「その男は、国に戻るとあの島から生きて帰ったという話をして驚かれました。そして、変わった言葉を残しています。『なぜか、鳥の言葉が悲しいものに聞こえた』……と」

その言葉には鳳郎も驚いた。

確かにあの時は、それまでの自分の行動を思い返し、感傷的になつていたかもしれない。しかし、言葉にはそのことを出さなかつたと思う。ならば想いか。言葉の節々にその時の自分の感情が混ざり、男はそれを感じたのかもしれない。

「後にも先にも、鳥が悲しそうに感じられたと言ったのはその男だけでしたが、私の中で赤い鳥に対する想いは深くなりました。鳥は悲しんでいる。なぜ？ 島に留まる理由がそこにあるのだろうか？

島に訪れ、直接話ができればそれが分かるのだろうか？」

気付くと鳳郎は、相崎の話に真剣に耳を傾けていた。この百年間、自分を他人に評価してもらったことなどない。ただただ孤独に島に居て、人間達と戦う毎日だった。そんな鳳郎にとって、他人と会話をするのがなぜか重要なことに思えたのだ。

「島に行きたいと思いました。しかし私にはまだ守るものが多すぎた。私を頼ってくる弟子達、私の身を案じてくれる友人達、私をしつつくれる者たちも大勢いるのです。なので、なかなか島に来ることはできませんでした」

敵意を持たないものに対しては大人しくなったらしいという話も、絶対ではない。現に昔は近づく者には容赦なく攻撃していたのだ。そんな鳥の住む島に上陸して、しかも話がしたいなどというのは非常に危険と言える。己の鳥に対する想いを満たすためだけに上陸するのをためらうのは当たり前だろう。

「しかし見ての通り、私はこのように歳をとり、守るものは少なくなりました。私の開いた修行場も、すべて弟子に引き継ぎ、親しくしていた者達には別れのあいさつを済ませてきております。後は死を待つのみ身となった私です、灼熱の炎に焼かれて殺される覚悟はできています。死の間際、あなたの話を少しでも聞かせてもらえれば。死後の世界に持っていく土産には十分すぎるでしょう」

覚悟。鳳郎は、目の前の人間からかつてない強い覚悟を感じた。相崎は、身の回りのすべてを片付け、殺されるかもしれないことを分かった上で、たった一人でこの島にやってきている。それも、たかが鳥一羽の話を聞きたいがためだけに……。

「姿を見せてください！ 幼いことから最も身近で、最も遠い存在だったあなたの姿を！」

空を飛ばば後ろ指をさされ、声をあげれば不気味だと罵られた自分の姿。百年経ってもいまだに癒えることのない心の傷。

それを今……鳳郎は乗り越える……。

「なんと立派な……」

相崎は思わず感嘆の声を漏らした。

鳳郎は力強く羽ばたき、相崎から良く見える木の枝にとまった。

太陽の光を受けて、鮮やかに映える赤い羽根。翼を広げ、尾羽や冠羽を揺らしながら大空を飛ぶ姿を見れば、誰もそれを醜いなどと罵ることはないだろう。

「特に面白みもない長い話だ。しかし、私にとってはとても重要な話だ。お前にとって意義のある話かは分からないが、付き合ってもらえるなら私はそれを嬉しく思う……」

鳳郎は目を細め、相崎にそう告げた。相崎は何も言わず、こくりと頷いた後身を正した。話を聞いてくれるということだろう。

「私が生まれたのはお前の国だ。あれは百年ほど前、その頃私は……」

淡々と、しかし思いを込めて鳳郎は語り始めた。生まれてから今までの生涯を、相崎はやはり何も言わず、それを静かに聞いていた。

*

*

*

「……これで、私の話はすべてだ」

鳳郎はすべてを話し終えた。百年の間があるとは言っても、そのほとんどは復讐で埋め尽くされている。語る内容はそう多くない。太陽がすっかり傾く頃には、鳳郎の話は終わった。

相崎は話を聞き終わると、おもむろに自分の胸に手を伸ばし、首飾りを鳳郎に見せた。どうやら開くようになっており、中には人の絵が入っているらしかった。

「妻の絵だ」

相崎はそう言っ て鳳郎にかざしてきたので、鳳郎はその絵をしつかりと見た。まだ若く、とても美しい女性の絵が描かれていた。

「美しい女性だ^{ひと}」

鳳郎が正直にそう口にすると、相崎は一度頷き、大切そうに胸にしまった。

「妻は数十年前に事故で亡くなってしまったんです。まだ結婚したばかりでしてね、子供もいなかった。その後何度か見合いの話も来たがすべて断りました。私は生涯妻以外の女性を愛することはしなかったし、出来ませんでした」

鳳郎はそれを聞いて顔を伏せる。相崎も愛する者を突然奪われた経験があるのだ。

「墓は家のすぐ近くなんです。だからよく花を持っていきます。そして墓の前に立つたびに、涙が溢れそうになるんです。だから……私はあなたの気持ちが良く分かる……」

相崎はそう言っ て、一筋に涙を零した。

「ありがとう！」

しかし、すぐに顔をあげて鳳郎を見た。その顔は穏やかだったのだ、鳳郎は相崎の中で愛する人を失った話は、過去の物になりつつあるのだと感じた。

「私の話が、何かの役に立てたのなら幸いだ」

これで相崎の要件は終わっ ただろう。自分は語るべきことはすべて語っ たのだから……。鳳郎はまた永遠の生をこの島でひたすら過ごすことになる。

「赤い鳥よ、あなたは自分の罪から解き放たれたいとは思いませんか？」

相崎は突然そんなことを言い出した。

「どういう意味だ？」

「女神はあなたの不老不死は罰であると言ったのでしょ？ 確かに私もそう思います。永遠に生き続けることが、幸せであるとは思えない。私が老人で、体のあちこちに不調が出て苦しんでいるからかもしれません……」

そうとも、不死は自分にとっては罰だ。死にたくとも死ねない。解放されたくとも解放されない。家族の……愛すべき者達の後を追いたくとも……追えないのだ……。

鳳郎にはそれが良く分かる。だがそれがどうしたというのだろう？ 『罪から解放されたくはないか』とは？

「私には、優秀な力を持った弟子たちがたくさんおります。呪術師の力……それは祈祷、占い、呪い……そして封印です」

「封印……」

「祈祷は魔を払い、占いは未来を知り、呪いはある事象を起こします。そして封印は、何かしらの力を封じ込めることができる」

先ほど、漕いでもないのに相崎が乗った船が海を進んでいたのも呪術の力だろう。そして封印は、力を封じ込めることができるという。

「私一人では神の罰を封じ込めることはできないでしょう。しかし、私の弟子達と力を合わせれば、あなたを解き放つことができるかもしれません」

鳳郎は、相崎が言わんとしていることを理解した。

「私を……殺すことができるというのだな……？」

相崎はこくりと頷く。

「危害を加えるつもりなどない。話を聞きに來ただけだという私がこんな話をするのを疑うでしょう。ですが私の話に嘘はありません。あなたに危害を加えるつもりなど全くない。ですから強制はしません」

相崎は鳳郎の顔をまっすぐとみる。その顔は使命に燃えているようにも見えた。

「ですが、私は思うのです。あなたはこれ以上苦しむ必要があるのでしょうか？ 家族の仇討をするために力を求めたら、それは罪だと言つて理不尽に罰を与えられ、永遠に休むことができない。百年という時間のほとんどを、あなたは戦うことに費やしました。体に幾千幾万もの傷を付け、幾千幾万もの罵声をその耳で聞いた。あなたはもう十分苦しんだはずではありませんか？ そろそろすべてから解放されてもいいはずです」

相崎が嘘を言っているとは思えない。演技ならあれほど感情のこもった言葉は言えないだろう。

それに、鳳郎は生に対して特に執着はない。そもそも死ぬるものならとつくに死んでいたかもしれない。騙された上で殺されたところで、それがなんであろう？ しかし……。

「私は墓を守らなくてはならない……」

家族の墓。これが今でも鳳郎をこの島に……この世界に繋ぎとめている。それを放棄することなどできるものか。

「……埋葬とは何でしょうか？」

「何……？」

相崎がまた話を変えた。

「私は妻を失った時、埋葬は死者のためにするのだと思いました。どのような生であつたとしても、最低限生きた証として墓という形で残してやりたい。そう考えてするものだと思いました。しかし、歳をとるうちに別の側面もあるのではないかと考えるようになったのです。それは、残された生者のためです」

「生者のため……」

「死は悲しいものです。ですが悲しむのは死者ではなく生者です。墓に埋葬するというのは、もちろん死者に対してするという意味合いもあるでしょうが、生者を慰めてやるという意義もあるのではな

いでしょうか？」

鳳郎はそれが何となく理解できるような気がした。そうとも、凰子達は埋葬してくれなど一言も言わなかった。鳳郎がそうしたかったからしたのだ。それによって、幾分か自分の悲しみが紛れた気もする。

「別れはつらい。だが、墓に行けばまだそこに居る。声は聞こえずとも、姿は見えずとも、そこにいるという気持ちになる。生者はそれによって悲しみを紛らわせる。その時墓は、誰のためにあると言えるのでしょうか？ 死者のためではない。生者のためです」

「……お前の言いたいことも分かる。だが、それでなんだというのだ？」

相崎は意を決したように口を開いた。

「あなたが死ななければ、あなたの家族も永遠に死ぬことができないのではありませんか？」

「なッ!？」

鳳郎は相崎の一言で衝撃を受けた。何か自分の中の心を見透かされたようなそんな衝撃を……。

「失礼なことを言いましたね……。気に障ったのなら謝ります。私になにを言っても、あなたの生き死にを決める権利などありません。ですがもし……」

そう呟いて、相崎は懷から玉のようなものを取り出してその場に置いた。

「もし休みたいと思ったのならこの玉を割ってください。すぐに駆けつけて迎えに来ます。……ただ、私も長くはないと思いますので、決心されるならお早めに……」

相崎はそう言って一礼をしてから小舟に向かって歩き始めた。

「……待ってくれ!」

鳳郎はそう叫んで相崎を呼びとめた。

「……決心はついた。確かに私は家族のためと言いながら、自分のことしか考えていなかったのかもしれない……」

「では……」

鳳郎は目を瞑り、少し間を置いてから相崎に言った。

「私を、殺してくれ」

第十一話『航海』

相崎は鳳郎の意志を確認すると、小さな鈴を取り出してそれを鳴らした。

鈴を鳴らせてからしばらくすると船がやってきた。鈴の音が、沖合に止まっていた船まで届くはずがないのだが、これも呪術の一つだろうか？ 呪文を呟く様な仕草は全くなかったのだが……。

鳳郎が首を傾げていると、それを察した相崎が説明してくれた。

「鈴を良く見てください。小さな文字が書いてあるでしょう？」

言われて鈴を良く見ると、針で波線を描いたような字が彫り込んであった。

「これが呪文の代わりです。物体に呪文を書くことによって発動させるものもあるのです。ただ、呪文を書くだけでなく、その物体に気を送り込まなくてはなりません……」

鳳郎はそう言うものかと心の中で呟き、深くは気に留めなかった。難しいことは分からないし、原理が分かれば特に考え込むこともない。

相崎が言うには、船に乗っているのはすべて自分の弟子達らしい。弟子達は、相沢の無事を確認すると表情を緩めたが、すぐに鳳郎の存在に気付いて緊張した。

何しろどれだけの人間を焼き殺したかもわからない怪物なのだ。安心だと判断したから呼ばれたのだろうが、そんな危ない鳥の傍にいつまでも居たくはない。急いで梯子はしこを下ろし、手招きして相崎を呼ぶ。

「少し話をします」

相崎はそう言って梯子を登って行った。鳳郎が船に乗ることを話

に行くのだろう。いきなり鳳郎が船に乗り込めば、混乱してしまう。相崎が船に乗り込んでから少しすると、怒鳴るような声が聞こえ始めた。

これは説得するのは難航しそうだなと思い、鳳郎は島を振り返って墓がある方を見つめた。

「鳳子……すまない……」

鳳郎は一言謝罪の言葉を口にした。鳳子の期待……遺言ともとれる最後の言葉を裏切ってしまったことについて……。

『私達だつて幸せに生きる権利があるのだということを証明して欲しいのです！』

「お前達が殺されてしまった時点で、私に幸せな生などあり得なかったんだよ……」

鳳郎の願いとは何だったのか？ 仲間を得ることだ。孤独から解放され、共に生を歩む仲間を手に入れ、精一杯生きること。

一度は手に入れることができた。しかしそれはわずかの時間に奪い去られ、鳳郎は悲しみの底に沈んでしまった。

もう一度それを手に入れるために旅立とうとしても、鳳郎は家族の亡骸に縋^{すが}り、守り、この島に縫^ぬい止められてしまった。

幸せな生などあり得るはずもない……。

だが、それなら……。

『このままでは、あまりに悔しいではありませんか。……誰からも認められず、忌み嫌われ、住んでいた故郷を追い出される』

これくらいはできたはずじゃないのか？ この言葉は、誰かから認めてもらいたい、好かれないまでも、嫌われることなく生きたかったと鳳郎に訴えたようにも解釈できる。ならば、鳳郎がそのように生きたなら、間接的に鳳子や子供達も認められたことになるのではなかったのだろうか？

しかし鳳郎はそうには生きなかった。それどころか、正反対

のことをしてしまったのだ。

数えきれないほどの人間達を、怒りにまかせて焼きつくした。その結果、人間達は鳳郎を恐れ、怯え、距離を取った。そしてしまいには、『孤島に住む赤い凶鳥』と呼んで化け物扱いをしたのだ。

別に認められるなら人間達でなくてもいい。むしろ、認められるというなら、同胞である鳥達に認めてらうのが一番いいだろう。だが、赤い凶鳥と呼ばれるまでになった鳳郎を、鳥達は迎え入れてくれるだろうか？

圧倒的な力の前に跪き、^{ひざまず}ゴマをするようにご機嫌伺いをしてくることならあるかもしれないが、それでは凰子が言った『認められる』ということとは違う気がする。

支配ではなく、共生したいのだ。共に生きたい。わずかな時間でもいいから仲間として認められたい……。

しかし、もう何もかも遅すぎる。鳥にも人間にも……その他ありとあらゆる生き物に認められることなどあるものか。

「赤き鳥よ！」

相崎が船の上から鳳郎を呼ぶ。

「話がまとまりました！ 乗ってください！」

「……分かった！ ありがとうございます！」

鳳郎は相崎に返事をして、飛び立つ前にもう一度島の方を見た。「所詮私は嫌われし鳥だ。一体何ができるというのか。……もう、休みたい」

言い訳の様に呟き、鳳郎は飛び立った。

*

*

*

出発してから数時間がたった。船は海の波に揺られてゆっくりと前に進んでいる。

鳳郎は船尾にとまり、ぼんやりと島の方向を眺め続けていた。

鳳郎が船に乗り込むと、相崎の弟子達は恐れるように鳳郎から距離を取った。

これが百年間の自分の行ってきたことに対する結果か、鳳郎はそう思いながら自嘲し、邪魔にならないように船尾移動したのだ。

船が沖に出てから、船員である弟子達が、たまに鳳郎の様子を見に来る。どうやら船が燃えていないかを確認しているらしい。鳳郎は、それは当然だろうと思いつつも少し悲しかった。

島が見えなくなる瞬間、鳳郎は反射的に翼を広げて、飛び立とうとした。無意識のうちに島に戻ろうとしてしまったのだ。

しかしすぐに翼をたたみ、水平線を見つめた。その後もなんだか落ち着かず、翼を広げては閉じるのを繰り返した。

鳳郎は自分の島に帰ろうとしているのだ。だが、寂しさからではない。恐らく……。

「赤き鳥よ」

相崎が声をかけてきた。どうやら鳳郎が落ち着かないのを見てやってきたらしい。

「落ち着かないようですな。これから死のうたなのですから当たり前ですが」

「どうにも島に帰ろうとして体がうずくのだ。まあ大したことはない。ここで踊っているだけで本当に帰ったりはしないさ」

「……死ぬのが怖いのですか？」

恐怖、この世で死の恐怖以上のものはそうないだろう。それを考えれば、鳳郎が落ち着かないのも当たり前の話だ。だが、鳳郎は首を振った。

「恐怖ではない。たぶんこれは罪悪感だ……」

「罪悪感……？ 家族の墓を放ってきたことですか？」

鳳郎はまた首を振った。

「確かに放ってきたことは忍びない。だがそのことで悩んでいたのではないのだ。……はたして、私は本当に死んでもいいのだろうかと思っていたのだ……」

「……は？」

相崎は、どういふことか分からずに首を傾げる。

「女神は私の永遠の生が……いや、死を奪うことが罰だと言った。ならば私は、償いから逃げ出すことになる。それに対して罪悪感を覚えていたのだ」

「何を言うかと思えば、あなたは十分すぎるほど生きた。普通の鳥は十年生きれば長い方だ。あなたはそれの十倍は生きて苦しんだんですよ？」

「しかし、人間は軽く七十年は生きる。百年生きる人間は珍しいが、ありえない話ではない。なら、永遠の生を苦しむ時間としては、百年は短すぎると思う」

「あなたは鳥だ。何の引け目も感じる必要はない。大体、復讐することが罪だとする女神が間違っている」

「……それはそうだと思うが」

鳳郎は今だって、海賊たちに対して復讐したこと、家族の仇を取ったことを後悔していない。しかしその後の行動はどうだっただろうか？

復讐として海賊たちを焼き殺すことが罪なら、罪なき者達を焼き殺すことは重罪のはず。それに対する償いはどうなのだ？

そう言う思考が働き、これから死のうとする自分の行動に対して罪悪感を覚えてしまうのだろうか。

「それより赤き鳥、ちょっと来て欲しいのですが？」

「ああ、構わない……」

相崎は鳳郎を船の中に案内した。そして倉庫のような場所まで来ると、木箱を指さした。

「大変申し訳ないのですが、入国してから私の道場に行くまで、この箱の中に入って欲しいのです」

「箱の中に？ なぜ？」

「入国するときに、あなたが国の人間に見られるのはまずい。だから、荷物として道場までお連れしたいのです。あなたが現れてから……というと、気を悪くされるかもしれませんが、周辺国の人間は、赤い鳥に対して神経質になっているのです。少しでも体が赤い鳥はすべて捕まえられ、殺処分されてしまうほどです」

「なんだって……？」

自分が国の人間に見られるのがまずいというのはすんなり納得したが、赤い鳥が殺処分されるという話は衝撃だった。

かつては自分を迫害した鳥達、又はその子孫達とは言っても、自分のせいで大きな迷惑をかけているのは申し訳ない。

凶鳥……不幸を運ぶ鳥、不幸を生み出す鳥、存在するだけで周りを不幸にする……。

「心配ですか？ 大丈夫ですよ。あなたには鉄をも溶かす無敵の炎があるじゃないですか。こんな木の箱にいくら細工をした所で、あなたを畏になどはめられません」

相崎は、鳳郎がこの箱を怪しんで深刻な表情をしていると思ったようだった。

「相崎……一つ頼みがある……」

鳳郎は声が震えそうになるのを必死でこらえながら口を開いた。

「なんですか？」

「もし私を殺すことができたなら、そのことを国に……世界に対して公表してくれないだろうか？ そのせいで迷惑をかけるかもしれないが、私は消えなければならぬ……」

相崎は少し驚いた表情をして鳳郎を見た。

鳳郎は木箱の開いている所から中に入り、相崎を振り返る。死ぬ
ことに対する罪悪感は、すっかり忘れ去ってしまった。

「頼む……」

鳳郎の呟きに対し、相崎は静かに頷いた。

第十二話『帰郷』

相沢は鳳郎に話しかけたことには、神林王国^{かみはやし}まであと少しのところだっただけ。鳳郎が木箱の中に入ってから、いくらもしないうちに港の音が聞こえてきた。

入港したらできるだけ音は出さないように指示を出されたため、鳳郎は息を潜めて木箱の中でじっとしていた。

しばらくは、ゆらりゆらりと波に揺られている感覚しかなかったが、突然木箱が大きな音をたてて揺れた。港に入り、箱を運ぶために台車にでも乗せたのだろう。

「おい！ その箱までッ！」

ガヤガヤとした港の中に、大きく叫ぶ声が響いた。

鳳郎は、この声が自分の入っているはこのことを指しているのではないことを祈った。しかし箱の動きが止まったので、相崎達が呼び止められたのだとすぐに察しがついた。

鳳郎は今まで以上に息を潜めて聞き耳を立てる。

「お前達の荷物の中で、その箱だけ異様に大きいな。少し中身を見せてみる」

「これはこれは、入国審査官殿、今日もお勤めご苦労様です。荷物検査ですか？」

相崎がやけに説明臭く挨拶をする。鳳郎に状況を伝えようとしているのだろう。どうやらこの木箱は不審に思われたらしい。

「挨拶はいらない。さっさと中身を見せろ」

「できません」

「何？」

相崎はきつぱりと中身を見せることを拒否する。すると、審査官

の声色が変わった。余計に怪しまれたようだ。

「……お前達呪術師だな。呪術師の荷物は丁寧に審査するのは常識だし、マニュアルにも優先的に審査するようという項目がある。確認せずに通す訳にはいかなあ」

「この荷物は王宮へのお届け物です。勝手に中身を空ける訳にはいきません」

「……ほう？」

審査員は値踏みするような声を出す。状況はまるでよくなっていないようだ。

「王宮への荷物だと？ この何の変哲もない木箱が？ 王宮にこんな質素な荷物が届くはずあるまい。この箱のどこに金属がつかわれている？ 宝石はどこだ？ 最低でも見栄えのいいように模様くらいあるべきだろうが。これが王宮への荷物のはずがない」

審査官は見破ってやったぞと言わんばかりの様子だ。今にも無理やり木箱を開けそうな雰囲気さえ感じる。

相崎も相崎だ。呪術師として何十年も過ごしているなら、呪術師に対する審査が厳しいことくらい知っているはず。それに対して何の対策もしなかったのか？ 変装くらいはするべきだったろうに……。

いや……そんなことは相崎も百も承知しているだろう。しかし相崎は、そんな対策をする暇などなかったのだ。なぜなら、鳳郎を連れて帰ることは予定外だったからだ。

初めから鳳郎を連れて帰る予定だったならともかく、鳳郎を連れて帰る予定ではなかったのだから、対策などしているわけがない。船の中にたまたまあった箱の中に鳳郎を押し込めるのが精いっぱいだったのだろう。

だから後は相崎の話術だけが頼りだ。今までの会話を聞く限り、かなり部が悪い様だが……。

「どうあつても中身を見せないつもりか？ これ以上拒否するつもりなら、法律によってお前を逮捕することになるぞ？」

それまで静かだった弟子達が少しざわめいた。それだけでもかなり緊迫した状況だというのが分かった。

「……では仕方ありません。これで通してもらえませんか？」

「なんだ……？ そ、それはッ！」

審査官の様子が変わった。非常に驚いているようで、声を荒げるのを抑えているようでもあった。

「これでもまだ通していただけないというのですか？」

「い……いや、しかし……」

審査官は迷っている様子だった。状況がマシになったのは分かったが、何を迷っているのだろうか？

「審査官殿。あなたはマニュアル通りに行動できる優秀な方だ。公務員、特にこういう仕事をするにはそう言う性格の方がいいと思うですがね審査官殿……たまにはマニュアルを無視された方が、自分に有益なこともあるのですよ。もしかしたら、ここが人生の分岐点になるかもしれないのです」

（金……かな？）

鳳郎は、相崎の話す内容を聞いてそう思った。鳥である鳳郎には分からないが、人間にとつて金は命の次に大切なものらしい。相崎ほどの呪術師になれば、金はたくさんあるのだろう。審査官一人買収できる程度には……。

「……分かった。通つていい」

「ありがとうございます。あなたの判断に感謝します。助言をしますが、このことは誰にも話さない方が良くと思いますよ？」

その後は誰に呼び止められることもなく、港を出ることができた。

港を出ると、海の上とは違うリズムで小箱が揺れる。馬車に木箱

を積んで運んでいるらしく、ガタガタと小さく揺れた。

「赤き鳥……気分はどうですか？」

相崎が普通の声の大きさを話しかけてきた。もう周りには自分の弟子しか居ないのだろう。

「気分は問題ない。どんな病原菌に触れても病気になったりしない体なんだ。船酔いなどしないさ。それより、さっきの港でのことが……」

「ああ、ある程度金を握らせたら通してくれました。使い道がない金があるあるので、気にしなくていいですよ」

相崎はそのことはさらっと流した。特に金を払ったことを後悔している様子もない。老人だからか、金に対する執着が薄いのだろう。

「申し訳ありませんが、目的地まで箱の中で我慢してください。他の人間に見られるのはさすがにまずいので……」

「ああ、構わない」

鳳郎はそう答えて緊張を解いた。一年しかいなかった故郷だし、百年も経つうちに見慣れた場所など変わってしまったているだろう。

それでもせっかく帰ってきたというのに、景色すら見られないというのは、寂しい帰郷だった。

*

*

*

しばらくは山道だったらしい。登っている感覚の次に下っている感覚が長く続いた。時々大きな音がして浮き上がったのは、大きな石でも馬車が踏みつけたのだろう。

下りきった後は長く平面の状況が続いた。そしてしばらくすると、港とは違ったざわめきに包まれた。どうやら街に入ったらしい。相崎が街に入った時、『この町に目的地があります』と声をかけてきた。ならば声を出すのはまずいと思い、鳳郎は軽く返事をした後は沈黙した。

馬車に揺られていると、楽しそうな人の声が聞こえてくる。こういう賑やかな雑音に包まれるのはいつくらいぶりだろう？ この雑音に慣れたものにとっては別段変わったものでもなく、むしろうつとうしく感じるものですらあるだろう。しかし鳳郎は、この雑音に包まれるのが少し心地いいのだった。

しばらくそんな雑音に包まれていると、急に馬車が止まった。誰かが降りる気配がした後、相沢が誰かと話をしているのが聞こえてきた。すると、大きな扉が開く様な音が響いてきた。どうやら、目的地についたらしい。

その後少しかだけ馬車に揺られる感覚に包まれた後、木箱が宙に浮いたような気がした。持ち上げられたらしい。

鳳郎はそこで一瞬だけ首をひねった。目的の建物の中に入ったのなら、もう木箱の中から出てもいいはず……。

しかし、その疑問はすぐに解消された。鳳郎を連れて帰るのは予定外のことのなだから、道場の人間達は当然知らない。そこに鳳郎の姿が現れれば混乱させてしまう。だから、最低限の人間にしか知らせないか、後でゆつくりと伝えるのだろう。そして……その後鳳郎を殺すことになる……。

どうやらかなり大きな道場らしく、馬車から降ろされた後もなかなか移動が終わらなかつた。そして、周りに人の気配はするのだが、不思議と話声が聞こえず静かなのが気になった。道場の人間にとつて相崎は師匠のはず。その師匠が返ってきたならもっとざわめいても良いだろうに……。

鳳郎はそう考えて相崎に声をかけようとしたがやめた。鳳郎はまだ声を出してもいいと指示を出されていない。それどころか、全く声をかけられなくなっていた。こんな状況で声を出す訳にはいかないだろう。しばらく何も考えずに大人しくしていることにした。

それからしばらく運ばれ続けた。だがある扉が開く音がして少しすると、箱は止まった。

「着きましたよ……赤き鳥……」

相崎の簡素な呟きと同時に指を鳴らす音がした。すると、木箱が解けるように消え始めた。一瞬鳳郎は驚いたが、『ああ、また呪術か』と思つて特に気にしなかった。

それまでずっと暗い箱の中に居たから、光が差し込んできた時部屋の様子が良く見えなかった。だが、この部屋が非常に広く、とても美しい飾り付けをされた部屋だということはかるうじて分かった。それに、甘い花のいい香りもする。

道場というと、狭いうえに汗臭く、シンプルな作りをしているものだと思ひ込んでいたから、目をこすりながら見たその光景は意外なものだった。相沢ほどの呪術師の道場ともなると、違うものなのだろう。

目が光に慣れてくると、部屋の様子がわかり始めた。

……いや、これはおかしい。いくらなんでもあり得ない……。

まず部屋の広さ。小さな家なら丸ごと一軒入ってしまいそうなほど広い。個人の所有している建物……団体が所有している建物にしてもだ！ 一部屋でこの広さはおかしい！ この建物はどれほど大きいというのだ！？

さらにおかしいのが、それだけ広い部屋にも関わらず、まったく手を抜かずに美しく飾られているということだ。ここが舞踏会の会場ならともかく、ここは道場のはずなんだろう？ 何でこんなに美しく飾る必要がある？ この部屋にある物を半分も売り飛ばせば一生遊んで暮らせそうじゃないか！

そして人……。これだけ広い空間なのに、全く空虚な感じがしない。それもそのはずだ、部屋の中には人間達が集まって整列しているのだ。そして皆姿勢を低くして沈黙し、ちらちらと鳳郎の方を盗み見てくる。人間達がこれだけ集まっているのに、これほど静まり返っているのも異常だが、その人間達の格好もまた異常だった。

相崎とその弟子達は、軽くて暗い色の魔術師のような服を着ていた。しかしここに集まっている人間はどうだ！？ 鎧をまとい、勲章を胸に付け、腰には剣を携えて、騎士のような……。いや、ようなではなく彼らは間違いなく騎士だ。似たような格好をした人間達と何度も戦ったのだから見間違うはずがない。

そして……。一番異常だったのが……。

「なん……。なんだこの鉄の檻はッ！」

鳳郎はいつの間にか鉄の檻の中に閉じ込められていた。その檻は大きく、今まで鳳郎が入っていたのとはほぼ同じ大きさのようだった。恐らく木の箱はカモフラージュだったのだ。まず鉄の檻を用意し、それを呪術か何か分らないが、木の板でコーティングしたのだろう。木の板が無くなり、本来の姿がこうしてあらわになったという訳だ。

「ようこそ赤き凶鳥さん？ あなたに会えて嬉しいわ」

鳳郎が鉄の檻に戸惑っていると、部屋の中に若い女の声が響いた。女？ 女などどこに居る？ 相崎達の中には女はいなかったし、部屋をざっと見回しても男の騎士たちがいるだけ……。

しかし、鳳郎はやがて声の主を見つけた。部屋の一番奥、その部分だけ階段で登れるようになっており、その一番上に置かれた巨大な椅子に少女が座っていた。

相崎達の呪術師衣装とも、騎士たちの鎧とも違う。何とも重そうで、豪華で、煌びやかな服を着た少女だった。

「状況が分かってなさそうね？ 当然だけど。だってそう言う風に
仕組んだんだもの！ それじゃあ私直々に色々教えてあげましょ
う」

そう言つて少女は立ち上がった。そして服を引きずりながらゆつ
くりとこちらに歩いてくる。付き人らしき者と、護衛兵らしき兵士
達も、その後ろに続く。

「この国がどこかについては勘違いしていないと思うわ。ここは神
林王国よ。ただ、この建物が何か分かってないのでしょう？ この
建物は、神林王国の王宮。そして、この部屋は玉座の間……この私、
神林王国国王……爛姫^{かんき}様のねッ！」

そう叫び、爛姫と名乗った少女は大きく腕を振りあげた。それと
同時に、部屋に居る者達が拍手をして歓声をあげる。

この部屋に居る誰よりも幼く、誰よりも弱く、しかし……誰より
も偉いこの少女に対して忠誠の意を示しているのだ。

第十二話『帰郷』（後書き）

予定の半分までしか進められなかった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4478v/>

嫌われし鳥の生涯

2011年10月7日03時19分発行